霧島山の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

えびの高原（硫黄山）周辺

硫黄山では、活発な噴気活動が続いています。硫黄山付近の浅いところを震源とする火山性地震は少ない状態で経過しました。

硫黄山では、現時点では噴火の兆候は認められませんが、活火山であることから、現在活発な噴気活動がみられている硫黄山火口内、及び硫黄山の西側 500ｍの噴気地帯から概ね 100ｍの範囲では、熱水・熱泥等が飛散する可能性がありますので注意してください。また、火山ガスにも注意が必要です。

地元自治体等が行う立ち入り規制に従うとともに、火口周辺や噴気孔の近くにはとどまらないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１、図２、図３-①②）

硫黄山の南側の噴気地帯では活発な噴気活動が続いており、監視カメラによる観測では、噴気が最高で 300ｍまで上がりました。今期間、同噴気地帯の噴気孔からの熱水の流出は確認されませんでした。

８日に実施した現地調査では、硫黄山の火口内及びその周辺の地熱域の状況に特段の変化は確認されませんでした。

なお、硫黄山の西側 500ｍ付近では、噴気及び地熱域は観測されませんでした。

・地震や微動の発生状況（図３-③④⑤⑥、図４）

硫黄山付近の浅いところを震源とする火山性地震は少ない状態で経過しました。今期間、火山性地震の月回数は 29 回で、前月（９月：16 回）と同程度でした。硫黄山近傍の地震計では、振幅は概ね変化のない状態で経過しました。火山性微動は 2023 年７月８日以降観測されていません。

えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、火山性地震の月回数は 21 回（９月：５回）でした。

震源が求まった火山性地震は、えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）の深さ１～５km 付近に分布しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、宮崎県及び鹿児島県のデータも利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・地殻変動の状況（図３-⑦、図５、図６）

GNSS 連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023 年５月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが、同年 11 月頃から停滞しています。

・全磁力変化の状況（図７）

全磁力観測では、観測を開始した 2016 年２月以降、硫黄山北側の観測点で全磁力の増加、南側の観測点で全磁力の減少といった、硫黄山周辺の地下での熱の高まりを示す変化が観測されています。南側の観測点では、変動の傾向が 2025 年 11 月頃から鈍化しています。



図 1-1　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　硫黄山付近の状況
（10 月 22 日、えびの高原監視カメラ）

硫黄山の南側の噴気地帯では、噴気が最高で 300ｍまで上がるなど、活発な噴気活動が続いています。

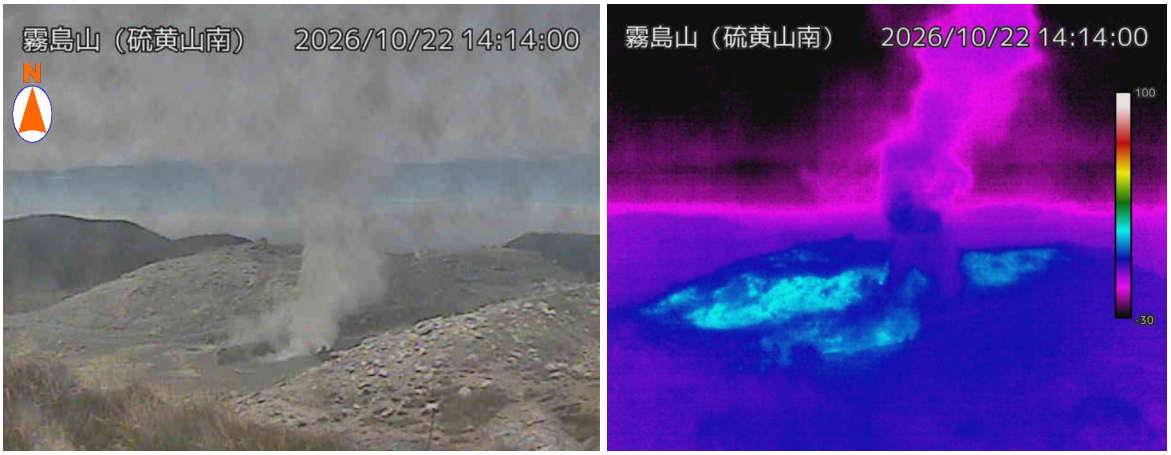


図 1-2　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　硫黄山南側の状況
（10 月 22 日、硫黄山南監視カメラ）

硫黄山の南側の噴気地帯では、活発な噴気活動が続いています。同噴気地帯内の地熱域の分布に特段の変化は認められませんでした。

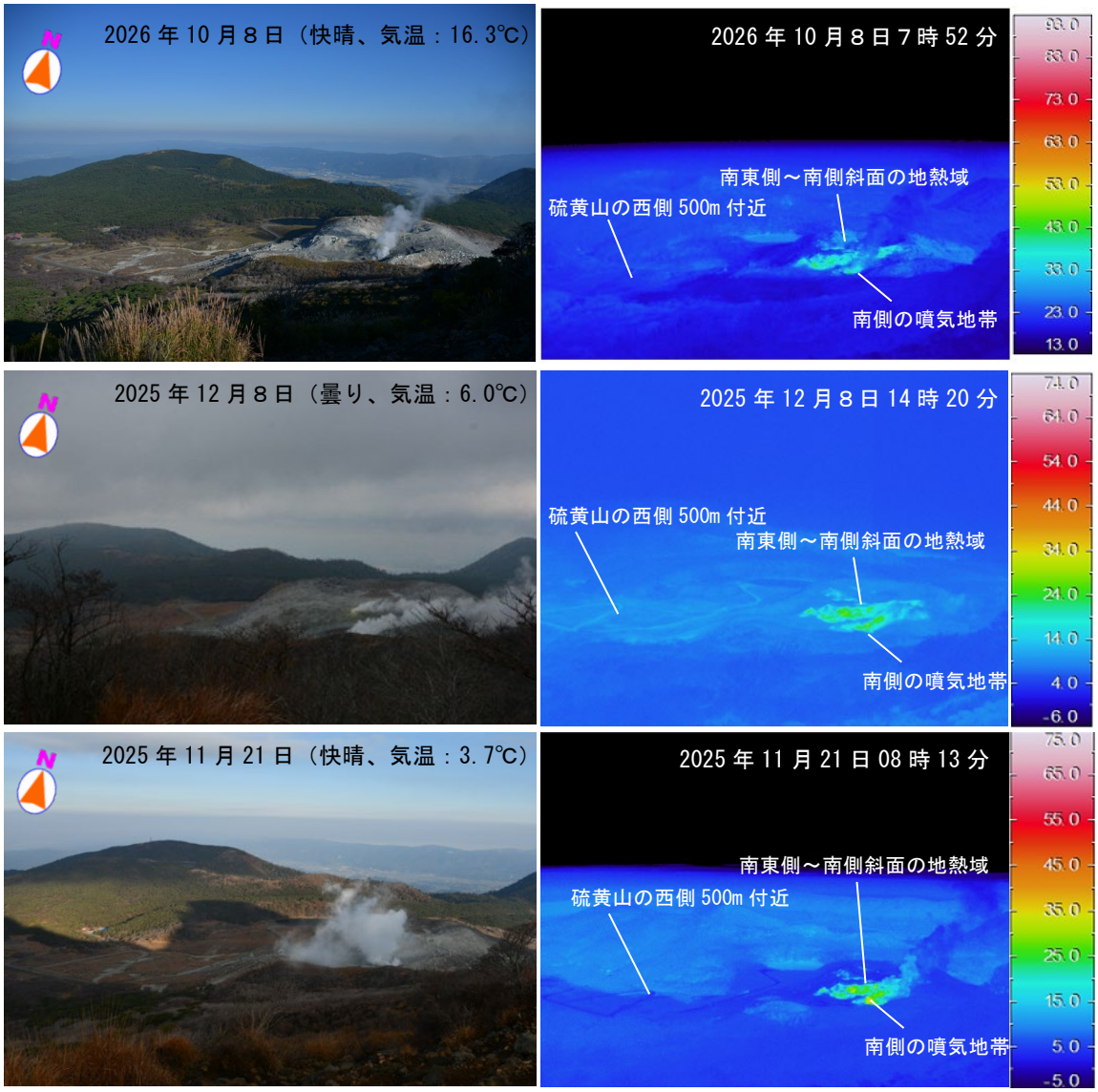


図 2-1　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　韓国岳４合目観測点からの硫黄山の火口及びその周辺の状況

・硫黄山の火口内及びその周辺の地熱域の状況に特段の変化は確認されませんでした。
・硫黄山の西側 500m付近では噴気及び地熱域は確認されませんでした。

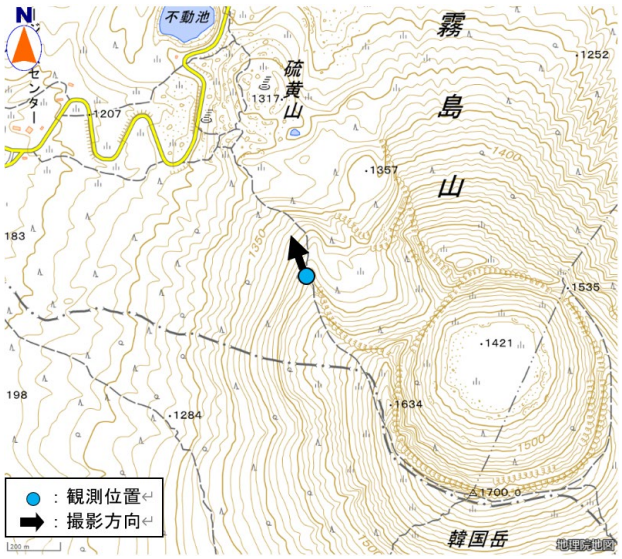


図 2-2　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　図 2-1 の観測位置及び撮影方向

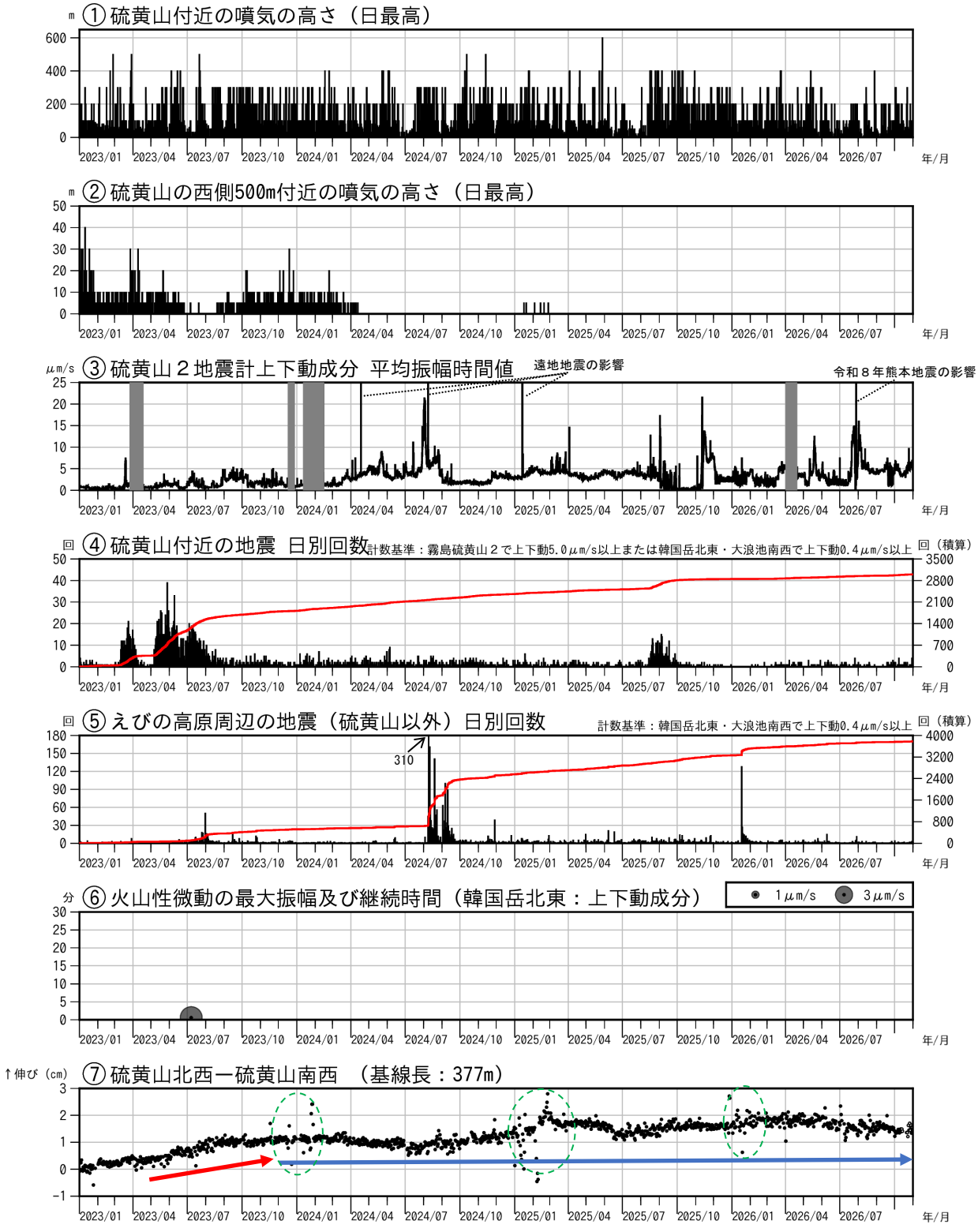

m ①硫黄山付近の噴気の高さ（日最高）
600
400
200
0
m ②硫黄山の西側500m付近の噴気の高さ（日最高）
50
40
30
20
10
0
μm/s ③硫黄山２地震計上下動成分 平均振幅時間値
遠地地震の影響
令和８年熊本地震の影響
25
20
15
10
5
0
回 ④硫黄山付近の地震 日別回数
計数基準：霧島硫黄山２で上下動5.0μm/s以上または韓国岳北東・大浪池南西で上下動0.4μm/s以上
回（積算）
3500
2800
2100
1400
700
0
回 ⑤えびの高原周辺の地震（硫黄山以外）日別回数
計数基準：韓国岳北東・大浪池南西で上下動0.4μm/s以上
回（積算）
310
180
150
120
90
60
30
4000
3200
2400
1600
800
分 ⑥火山性微動の最大振幅及び継続時間（韓国岳北東：上下動成分）
1μm/s
3μm/s
↑伸び（cm） ⑦硫黄山北西ー硫黄山南西 （基線長：377m）
3
2
1
0
-1
2023/01
2023/04
2023/07
2023/10
2024/01
2024/04
2024/07
2024/10
2025/01
2025/04
2025/07
2025/10
2026/01
2026/04
2026/07
年/月

図３　（前ページ）
霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）火山活動経過図（2023 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞
・監視カメラによる観測では、硫黄山の南側の噴気地帯で噴気が最高で 300ｍまで上がるなど、活発な噴気活動が続いています。硫黄山の西側 500ｍ付近の噴気地帯では、噴気は観測されませんでした。
・硫黄山付近の浅いところを震源とする火山性地震は少ない状態で経過しました。今期間、火山性地震の月回数は 29 回で、前月（９月：16 回）と同程度でした。
・硫黄山近傍の地震計では、振幅は概ね変化のない状態で経過しました。
・えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、火山性地震の月回数は 21 回（９月：５回）でした。
・火山性微動は 2023 年７月８日以降観測されていません。
・GNSS 連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023 年５月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが（赤矢印）、同年 11 月頃から停滞しています（青矢印）。

③の灰色の期間は、硫黄山２地震計のデータが欠測となっている期間です。
赤線は火山性地震の回数の積算（右軸）を示します。
⑦の基線は図６の②に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
⑦の緑色破線内の変化は地面の凍上の影響と考えられます。

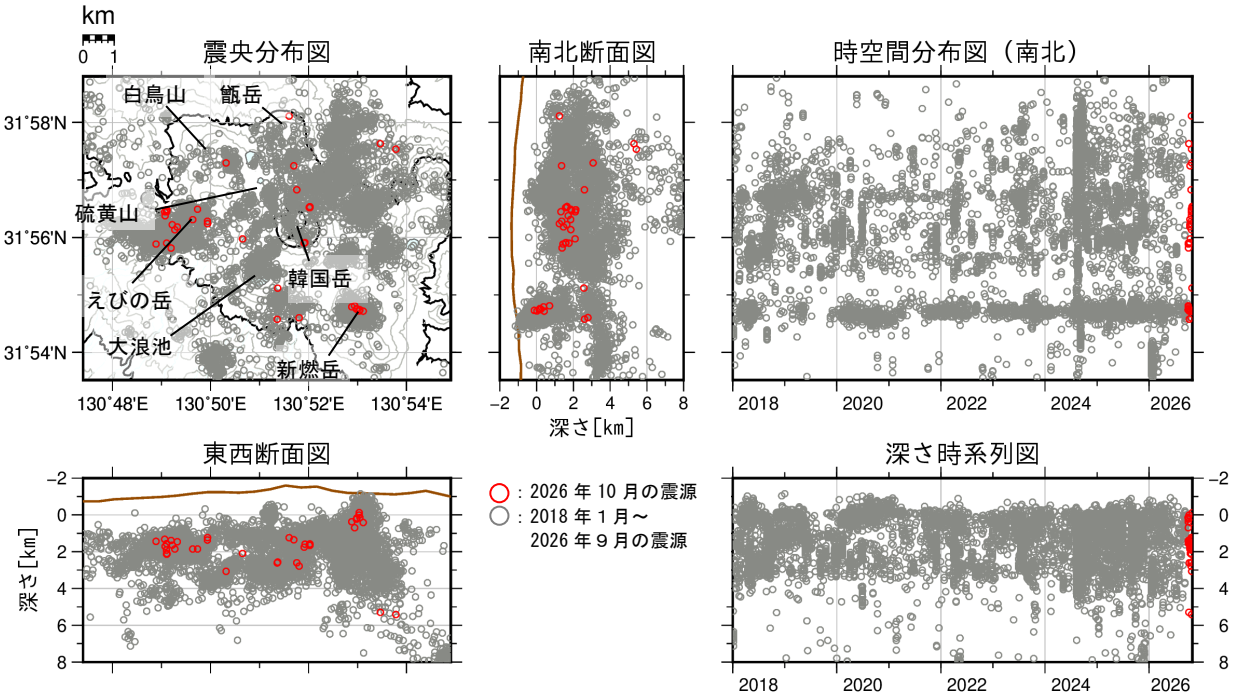


図４　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　震源分布図（2018 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞
震源が求まった火山性地震は、えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）の深さ１～５km 付近に分布しました。

※2018 年 10 月は、観測点の障害により、硫黄山近傍で震源が求まらなかった期間があります。

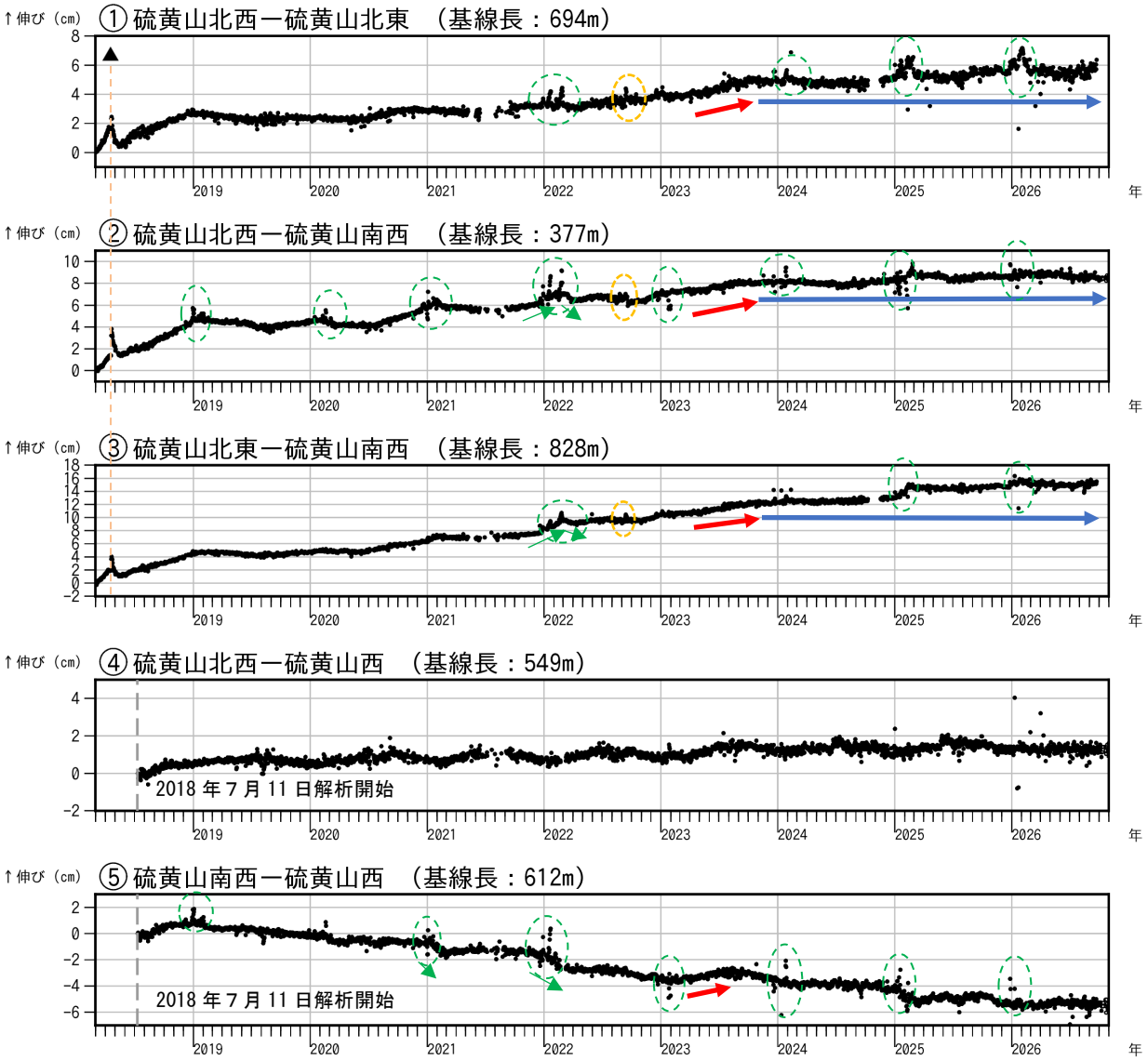


図５　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　GNSS 連続観測による基線長変化（2018 年３月～2026 年 10 月）

GNSS 連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023 年５月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが（赤矢印）、同年 11 月頃から停滞しています（青矢印）。

これらの基線は図６の①～⑤に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
緑破線内の変化は地面の凍上の影響、橙色の破線内の変化は台風等の気象要因の影響と考えられます。
②③⑤の基線において 2021 年１月及び同年 12 月頃から 2022 年３月頃にかけて認められる変化（緑矢印）は、硫黄山南西観測点の局所的な変動によるものと考えられます。
図上部の黒三角及び橙破線は、2018 年４月 19 日及び 26 日の噴火の発生を示しています。

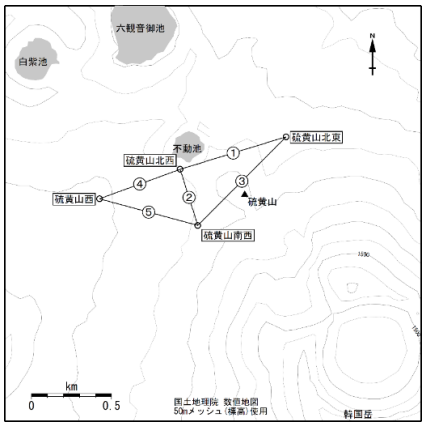


図６　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　GNSS 連続観測点と基線番号

白丸（○）は気象庁の観測点位置を示しています。

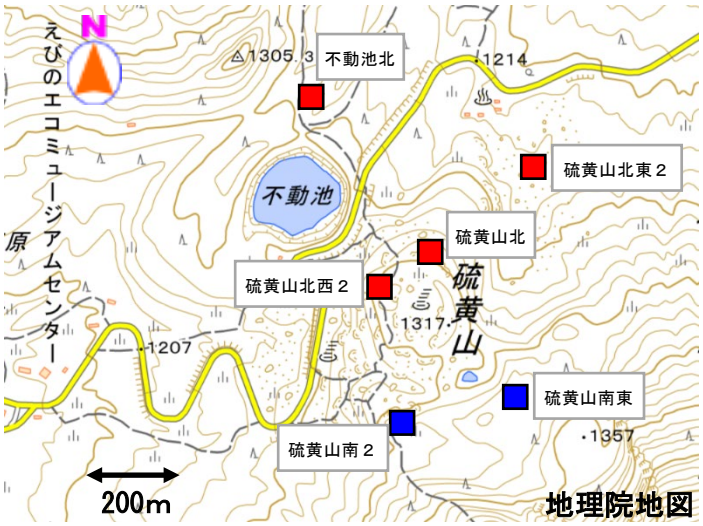


図 7-1　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　全磁力観測点配置図

2016 年２月の観測開始以降の各観測点の全磁力の変化傾向（図 7-2 の変化傾向）を「■（増加傾向）」「■（減少傾向）」「■（傾向なし、またはデータ不足等により傾向不明）」でそれぞれ示しています。

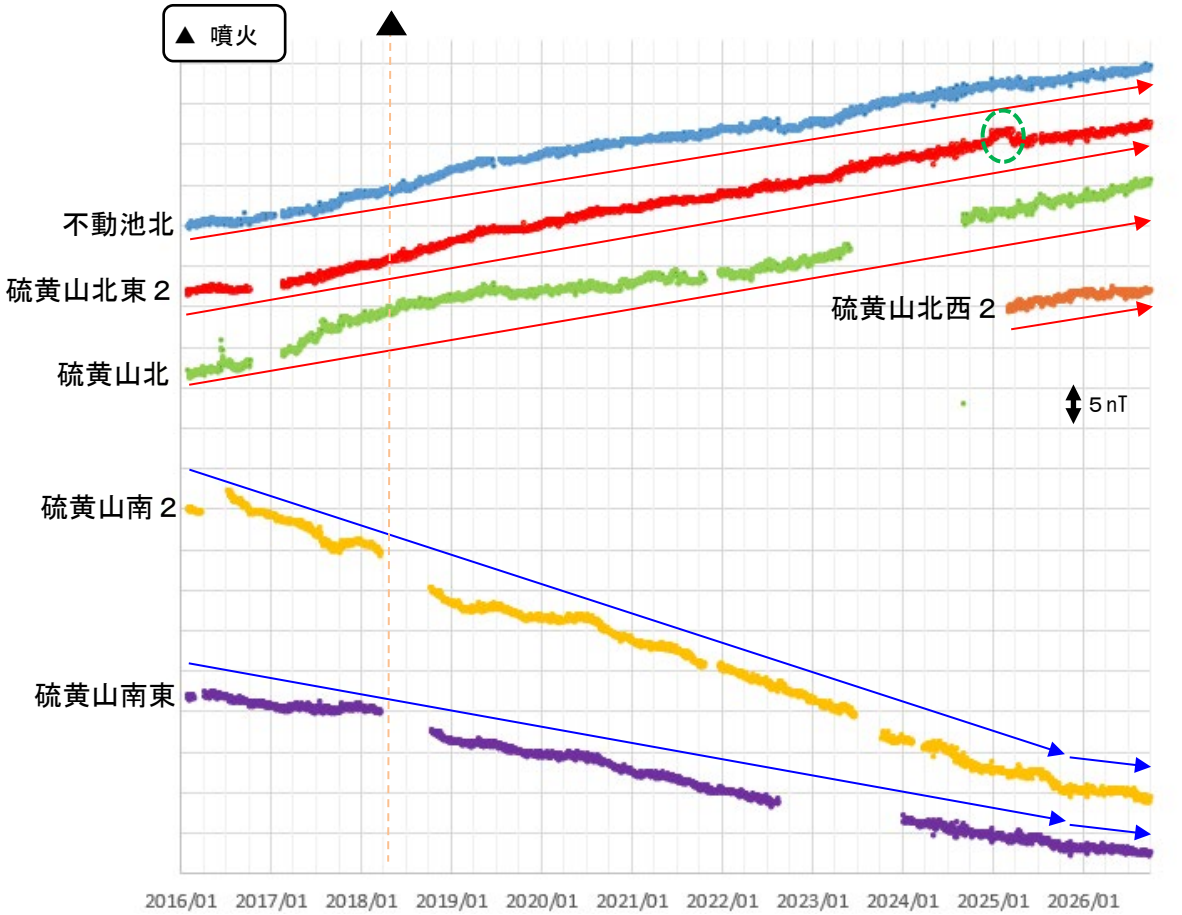


図 7-2　霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　全磁力観測点で観測された全磁力変動
（2016 年１月～2026 年 10 月）

観測開始（2016 年２月）以降、硫黄山の北側の観測点で全磁力の増加（赤矢印）、南側の観測点では全磁力の減少（青矢印）といった、硫黄山周辺の地下での熱の高まりを示す変化が観測されています。南側の観測点では、変動の傾向が 2025 年 11 月頃から鈍化しています。

各観測点と地磁気観測所鹿屋観測施設（硫黄山の南約 60km）の全磁力差分に年周変化及び磁気嵐等の影響の補正を加えた結果をプロットしています。
図上部の黒三角及び橙破線は、2018 年４月 19 日及び 26 日の噴火の発生を示しています。
空白部分は欠測を示しています。
硫黄山北東２観測点で 2025 年１月頃から３月頃にみられる変動（緑破線内）は、観測点近傍での掘削工事によるものと考えられます。

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方向に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。火口周辺で観測した全磁力の値は、南側Ａでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Ｂでは強められて大きくなることがわかります（図 7-3）。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

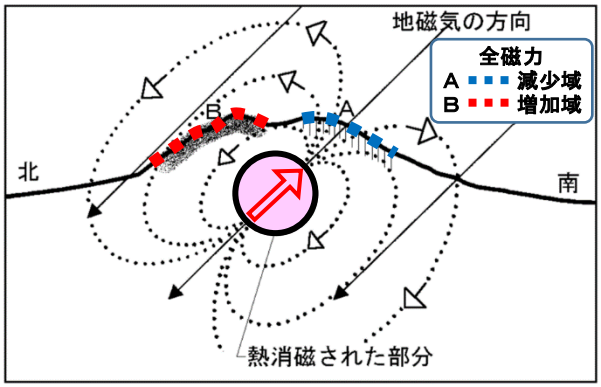


図 7-3　熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内の温度変化
北側で増加 南側で減少	消磁	上昇
北側で減少 南側で増加	帯磁	低下

大幡池

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。
活火山であることから、規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性がありますので、留意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１～３、図４-①）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

８日に韓国岳山頂付近から実施した現地調査では、大幡池及び大幡山付近において噴気や地熱域は観測されませんでした。

・地震や微動の発生状況（図４-②、図５）

火山性地震は観測されませんでした（９月：１回）。

火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図６、図７）

GNSS 連続観測では、一部の基線で 2025 年１月頃から同年７月頃に新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められました。その後は特段の変化は認められません。

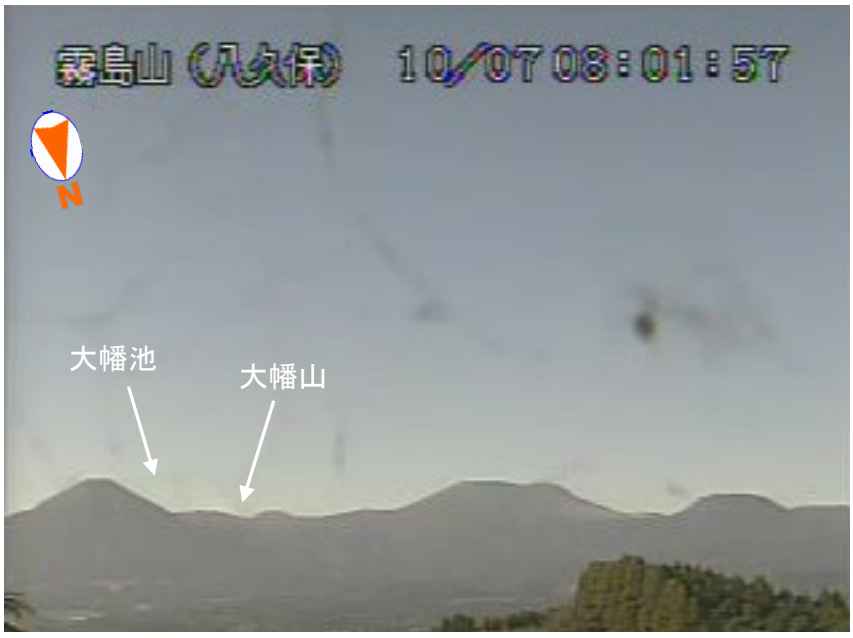


図１　霧島山（大幡池）　大幡池及び大幡山の状況（10 月７日、八久保監視カメラ）
監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

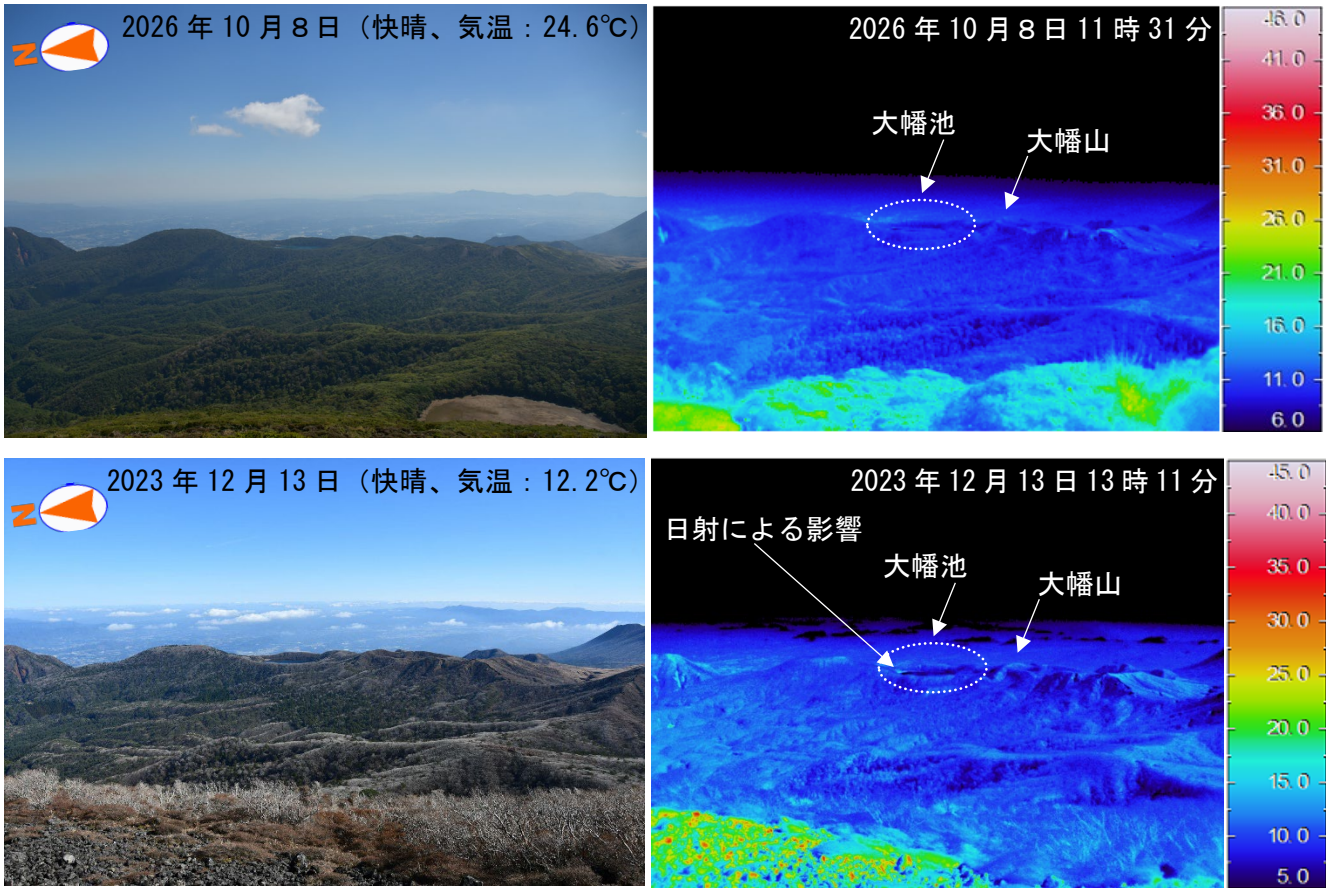


図２　霧島山（大幡池）　大幡池及び大幡山の状況（韓国岳山頂付近（図３）から観測）

８日に韓国岳山頂付近から実施した現地調査では、大幡池及び大幡山付近において噴気や地熱域は観測されませんでした。

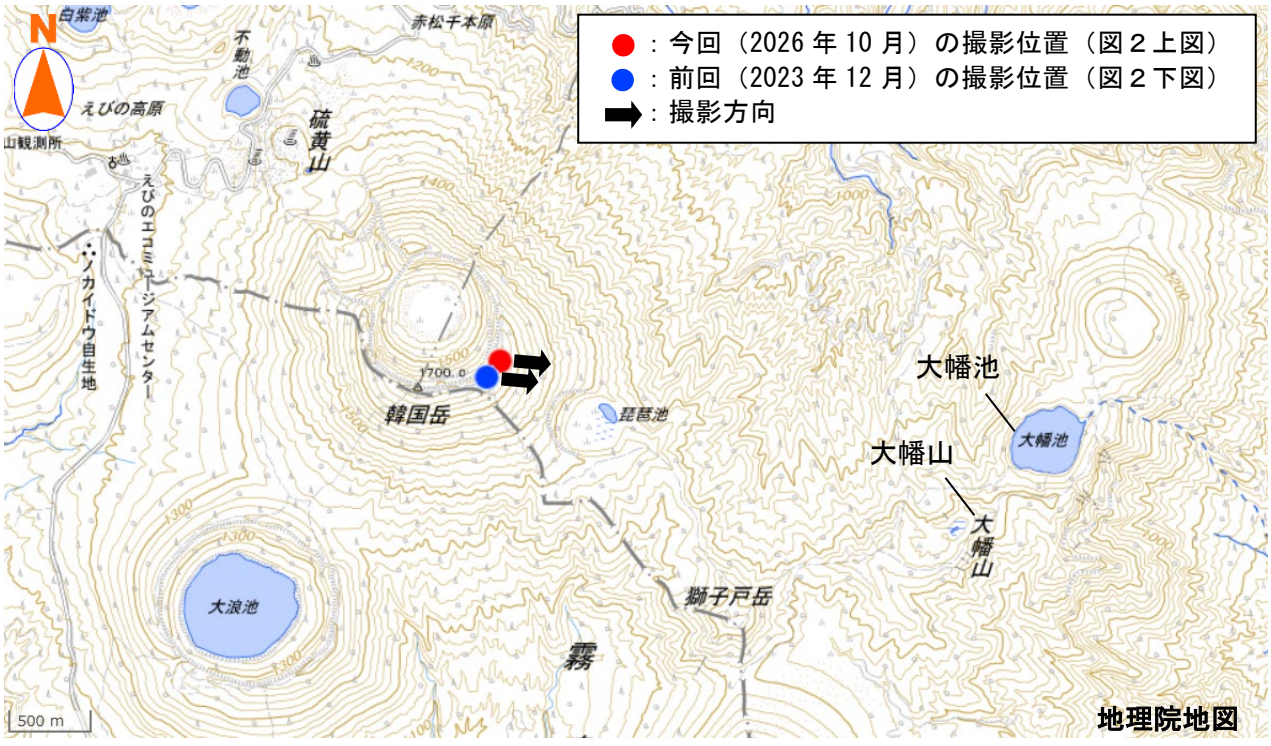


図３　霧島山（大幡池）　現地調査観測位置及び撮影方向

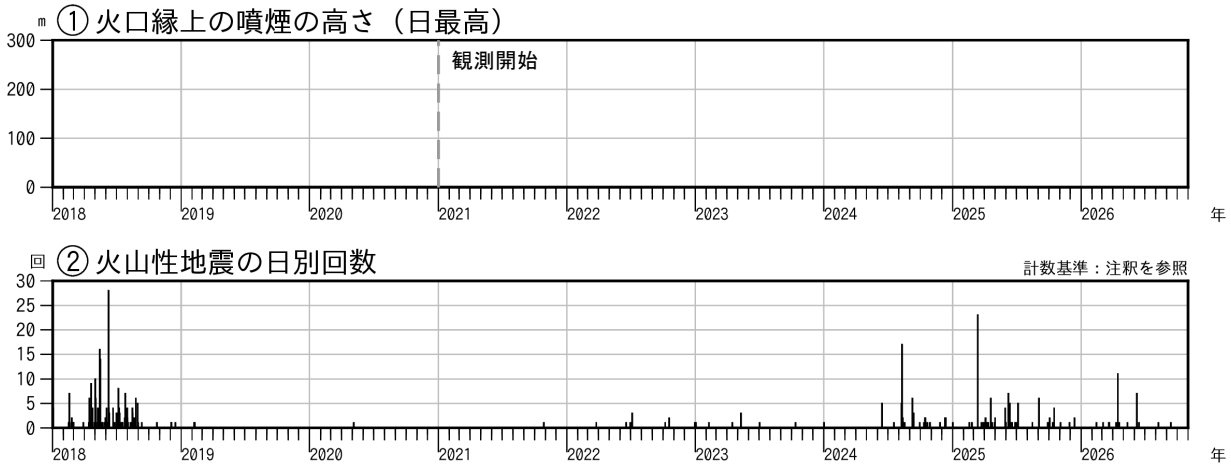


図４　霧島山（大幡池）　火山活動経過図（2018 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

・監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

・火山性地震は観測されませんでした（９月：１回）。

大幡池付近の火山性地震の回数について、2020 年 12 月 31 日までは「新燃岳南西観測点（計数基準　水平動：2.0μm/s）」で計数していましたが、大幡池付近の地震活動をより正確に捉えるため、2021 年１月から「大幡山登山口観測点（計数基準：南北成分：6.0μm/s）」で計数しています。

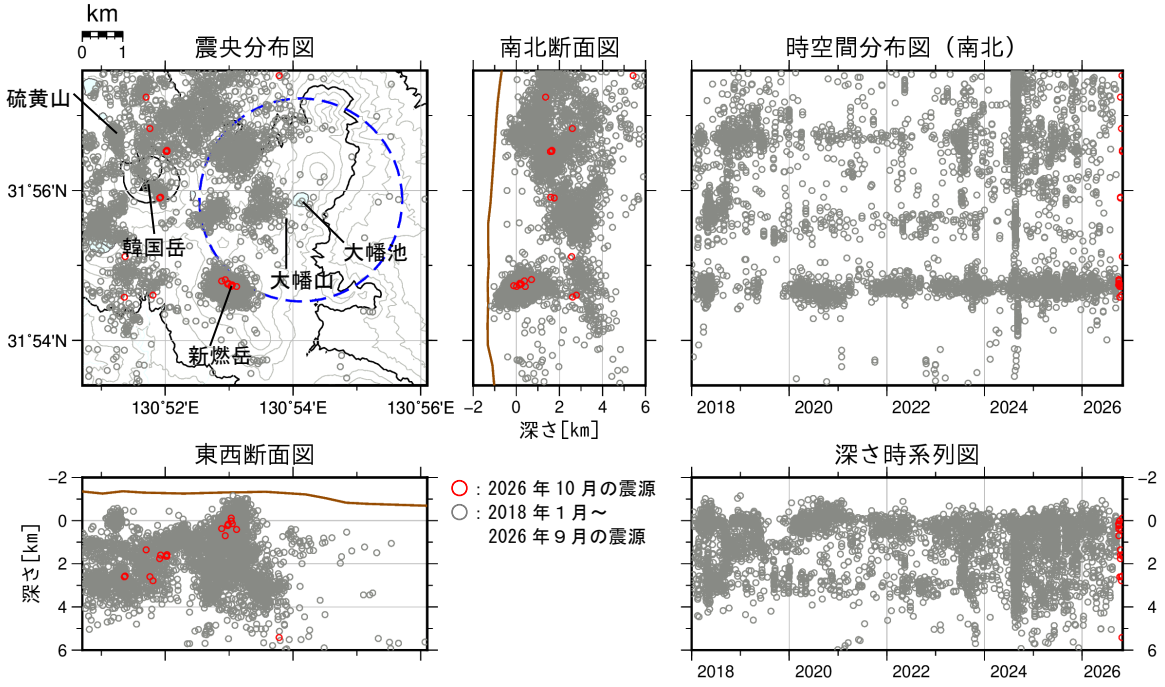


図５　霧島山（大幡池）　震源分布図（2018 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

震源が求まった火山性地震はありませんでした。

霧島山（大幡池）の火山活動については、主に大幡池及び大幡山付近（青破線内）の地震活動に注目して監視しています。大幡池及び大幡山付近では、新燃岳の火山活動が活発であった 2018 年３月から７月にかけて火山性地震の増加がみられたことがあります。

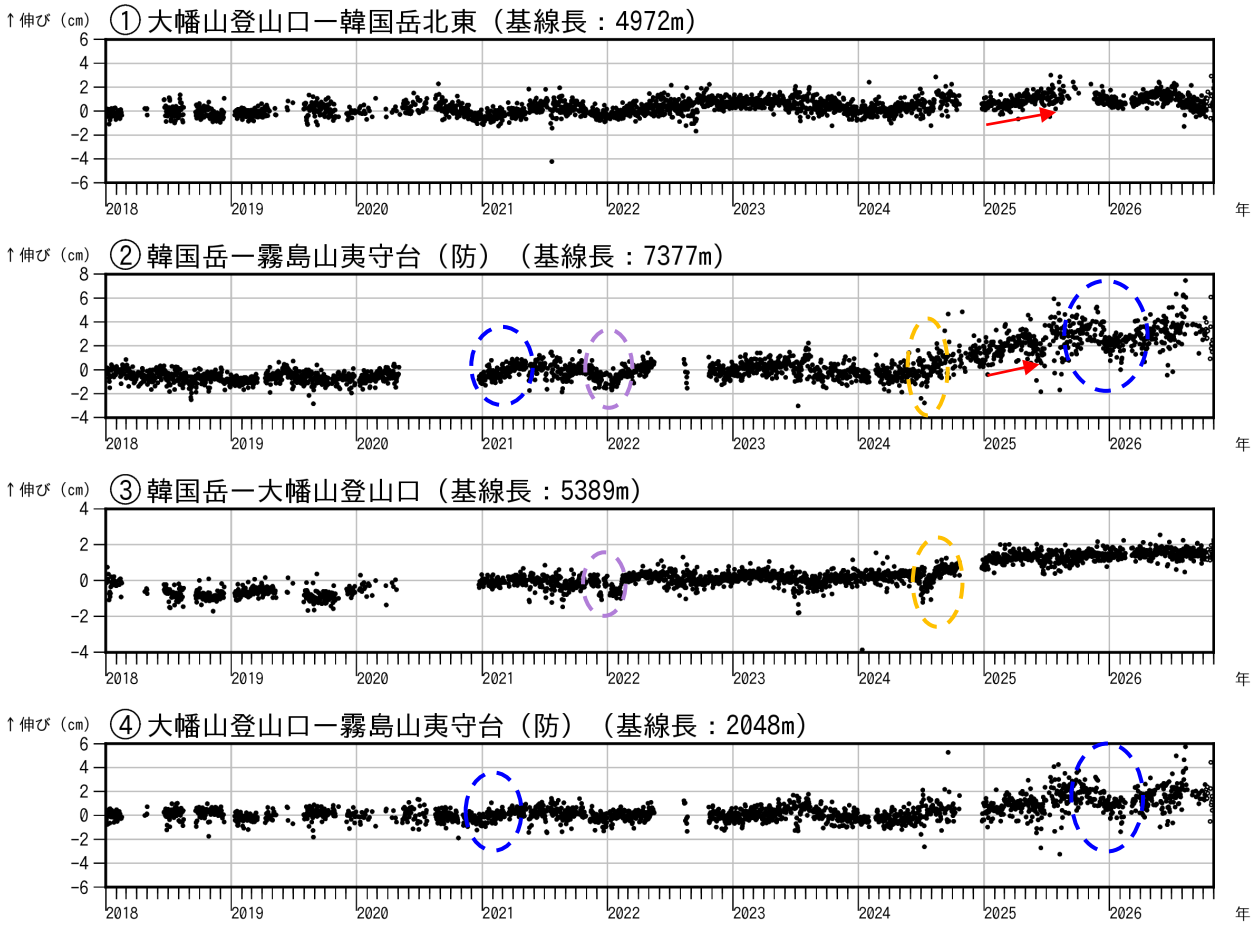
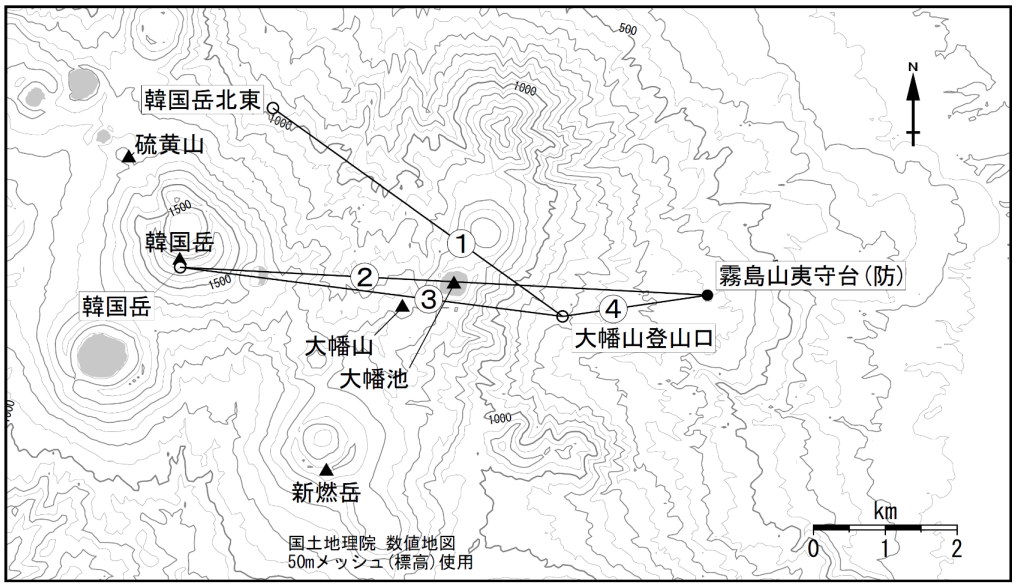


図６　霧島山（大幡池）　GNSS 連続観測による基線長変化（2018 年１月～2026 年 10 月）

GNSS 連続観測では、一部の基線で 2025 年１月頃から同年７月頃に新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められました（赤矢印）。その後は特段の変化は認められません。

これらの基線は図７の①～④に対応しています。
直近のデータは白丸で示しています。基線の空白部分は欠測を示しています。
青色の破線内の変化は、霧島山夷守台(防)観測点の局所的な変化に伴うものと考えられます。
紫色の破線内の変化は、韓国岳観測点の局所的な変化に伴うものと考えられます。
橙色の破線内の変化は、2024 年８月８日の日向灘の地震による変動です。
（防）：防災科学技術研究所



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（防）：防災科学技術研究所

図７　霧島山（大幡池）　GNSS 連続観測点と基線番号

新燃岳

新燃岳では、2025 年９月８日以降噴火は観測されていません。
火口直下を震源とする火山性地震は少ない状態で経過しています。
GNSS 連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、霧島山深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められていましたが、2025 年 12 月中旬頃からは停滞しています。
一方、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が１日あたり数百トンの状態が継続していることから、火山活動は高まった状態で経過しています。弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね２km まで、火砕流が概ね１km まで達する噴火が発生する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね２km の範囲では警戒してください。風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。
地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。
令和７年 10 月 17 日に火口周辺警報（噴火警戒レベル２、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１～３、図４-①②）

新燃岳では、2025 年９月８日以降噴火は観測されていません。

新燃岳火口では、噴煙の高さは火口縁上 500m以下で経過しました。監視カメラによる観測では、新燃岳西側斜面の割れ目付近では、噴気は認められませんでした。新燃岳火口内及び新燃岳西側斜面の割れ目付近では、引き続き地熱域が認められました。

８日に韓国岳山頂付近から実施した現地調査では、新燃岳火口内の噴煙や地熱域の状況は、前回観測時（2025 年 11 月 21 日）と比較して特段の変化は認められませんでした。新燃岳西側斜面の割れ目付近では、複数の場所で弱い白色の噴気が認められました。また、西側斜面割れ目付近での噴気に対応する地熱域の広がりは前回観測時（2025 年 11 月 21 日）と比較して同程度でした。割れ目下方においても、わずかな地熱域が認められました。

・地震や微動の発生状況（図４-④⑤⑥、図５）

新燃岳では、火口直下を震源とする火山性地震は少ない状態で経過しました。火山性地震の月回数は 154 回（９月：381 回）で、前月より減少しました。火山性微動は観測されませんでした。

震源が求まった火山性地震は、主に新燃岳火口直下の深さ０～１km 付近に分布しました。

・火山ガスの状況（図４-③）

新燃岳周辺で 30 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は１日あたり 300 トン（９月：100～200 トン）とやや多い状態でした。2025 年９月以降は１日あたり数百トンの状態が継続しています。

・地殻変動の状況（図４-⑦、図６、図７）

GNSS 連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、霧島山深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められていましたが、2025 年 12 月中旬頃からは停滞しています。なお、同基線では、2025 年７月上旬に、新燃岳の噴火活動に対応すると考えられるわずかな縮みがみられました。新燃岳付近の地下における膨張を示すと考えられる基線の伸びは、2025 年７月以降は認められません。

新燃岳周辺の傾斜計では、新燃岳の地下の膨張を示すような特段の変化は認められません。



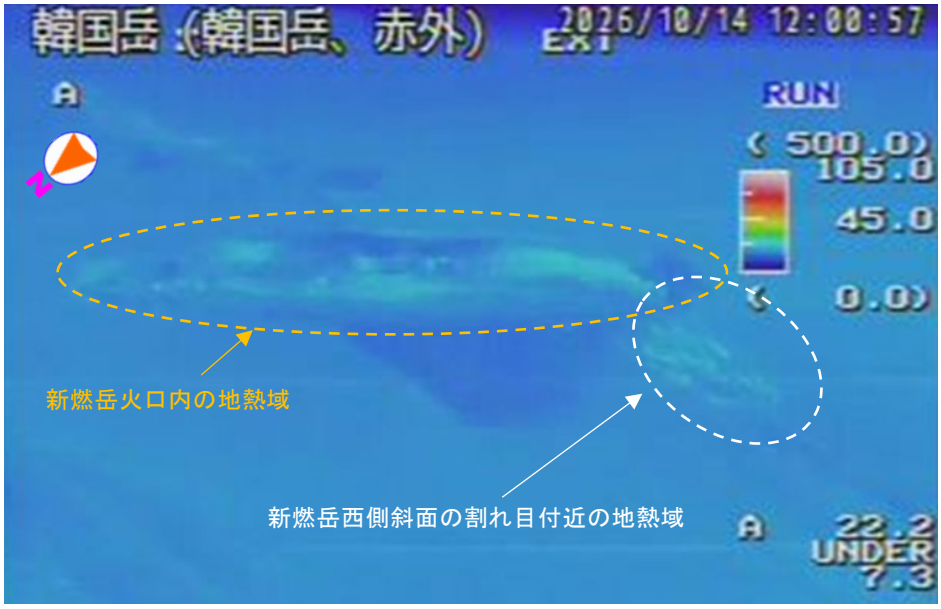


図１　霧島山（新燃岳）　噴煙及び地熱域の状況（10 月 14 日、韓国岳監視カメラ）

・新燃岳火口では、噴煙の高さは火口縁上 500ｍ以下で経過しました。
・監視カメラによる観測では、新燃岳西側斜面の割れ目付近では、噴気は認められませんでした。
・新燃岳火口内（橙色破線内）及び新燃岳西側斜面の割れ目付近（白色破線内）では、引き続き地熱域が認められました。

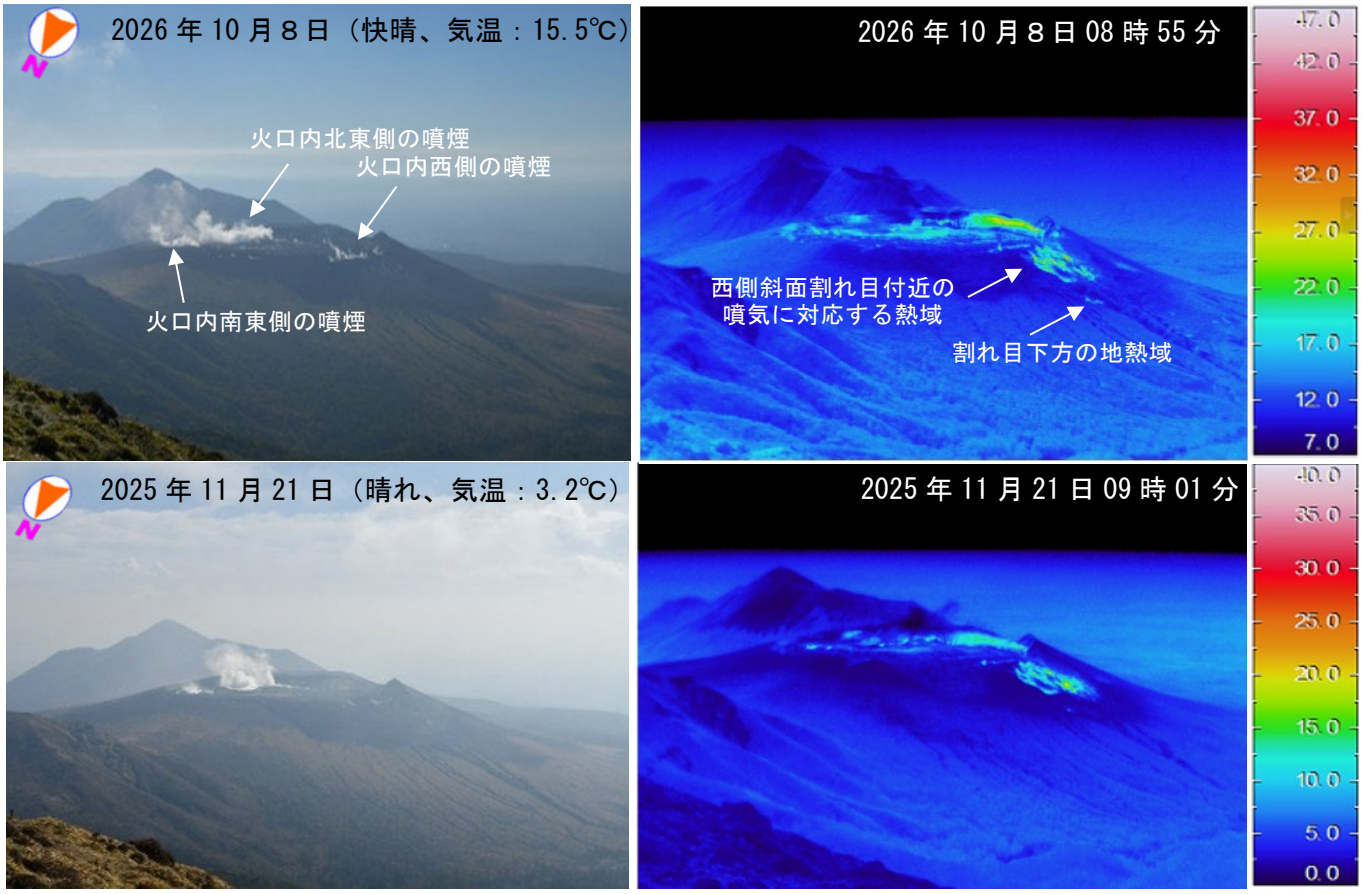


図２　霧島山（新燃岳）新燃岳火口内及び新燃岳西側斜面の割れ目付近の状況（韓国岳山頂付近から観測）

・新燃岳火口内の噴煙や地熱域の状況に特段の変化はありませんでした。
・新燃岳西側斜面の割れ目付近では複数の場所で弱い白色の噴気を観測しました。西側斜面割れ目付近での噴気に対応する地熱域の広がりは前回と同程度でした。
・割れ目下方においても、わずかな地熱域が認められました。

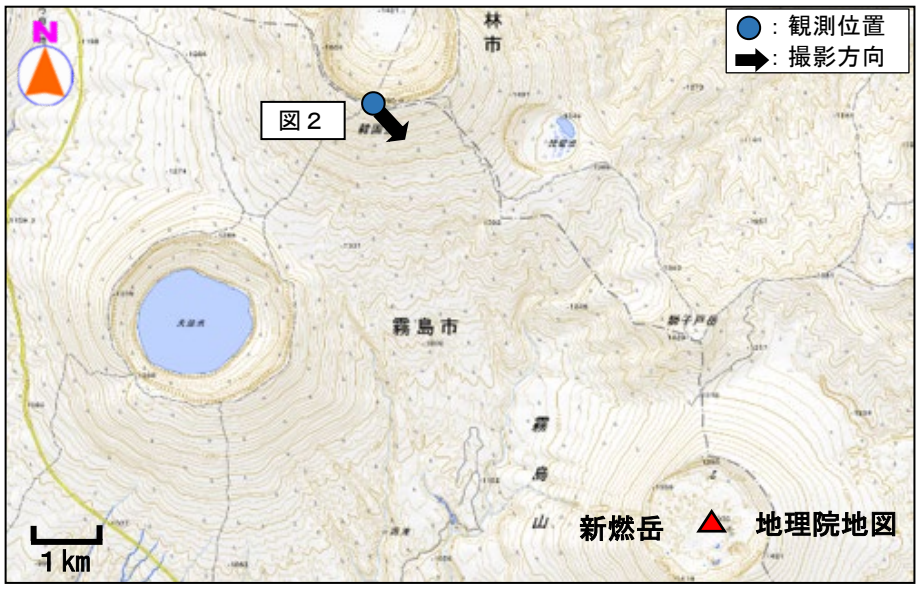


図３　霧島山（新燃岳）　図２の観測位置及び撮影方向

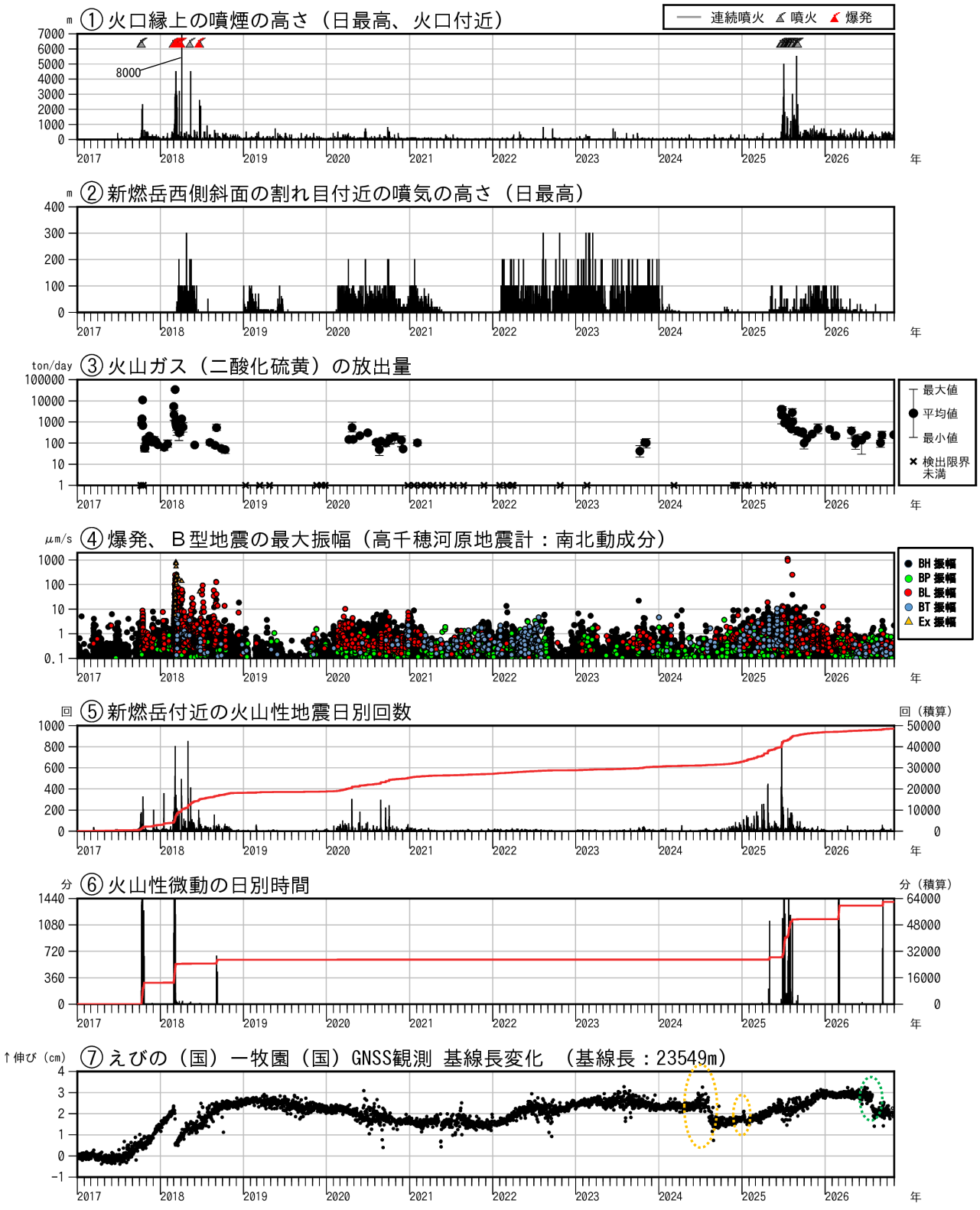


図 4-1　霧島山（新燃岳）　火山活動経過図（2017 年１月～2026 年 10 月）

⑦の基線は図７の基線⑦に対応しています。
⑦の基線の直近の白丸は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。
⑦の橙色破線内の変化は、日向灘の地震（2024 年８月８日、2025 年１月 13 日）による変動です。
⑦の緑色破線内の変化は、令和８年熊本地震（2026 年７月 28 日）による変動です。
※新燃岳南西観測点の機器障害により、新燃西（震）観測点、霧島南（震）観測点及び高千穂河原観測点で計数している期間があります。
※赤線は火山性地震の回数や火山性微動の時間の積算（右軸）を示します。

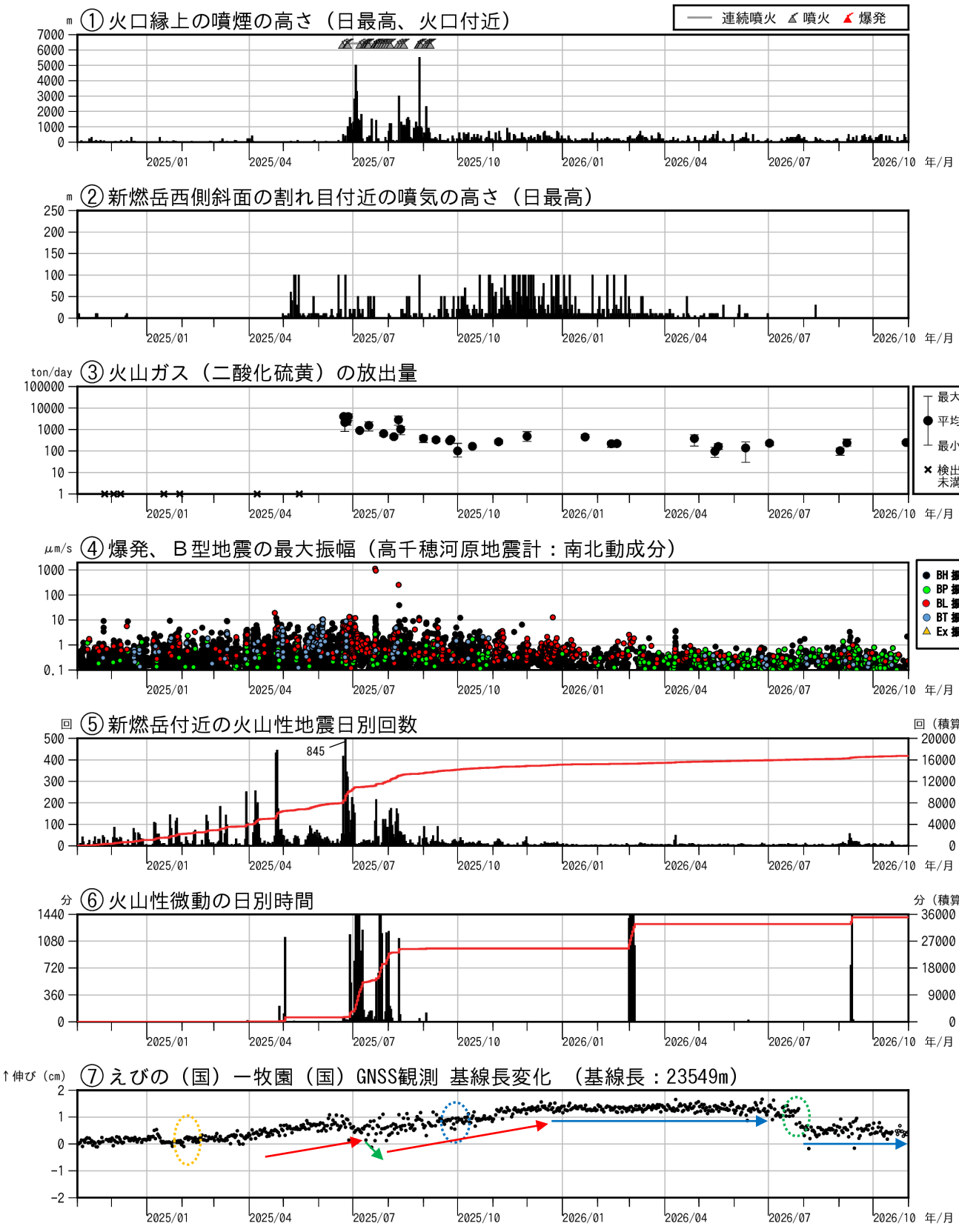

m ①火口縁上の噴煙の高さ（日最高、火口付近）
連続噴火 噴火 爆発
7000
6000
5000
4000
3000
2000
1000
0
2025/01
2025/04
2025/07
2025/10
2026/01
2026/04
2026/07
2026/10 年/月
m ②新燃岳西側斜面の割れ目付近の噴気の高さ（日最高）
250
200
150
100
50
0
ton/day ③火山ガス（二酸化硫黄）の放出量
100000
10000
1000
100
10
1
最大値
平均値
最小値
検出限界未満
μm/s ④爆発、Ｂ型地震の最大振幅（高千穂河原地震計：南北動成分）
1000
100
10
1
0.1
BH 振幅
BP 振幅
BL 振幅
BT 振幅
Ex 振幅
回 ⑤新燃岳付近の火山性地震日別回数
回（積算）
500
400
300
200
100
0
845
20000
16000
12000
8000
4000
0
分 ⑥火山性微動の日別時間
分（積算）
1440
1080
720
360
0
36000
27000
18000
9000
0
↑伸び（cm） ⑦えびの（国）－牧園（国）GNSS観測 基線長変化 （基線長：23549m）
2
1
0
-1
-2

図 4-2（前ページ）　霧島山（新燃岳）　火山活動経過図（2024 年 11 月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

・新燃岳火口では、噴煙の高さは火口縁上 500m以下で経過しました。監視カメラによる観測では、新燃岳西側斜面の割れ目付近では、噴気は認められませんでした。

・新燃岳周辺で 30 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は１日あたり 300 トン（９月：100～200 トン）とやや多い状態でした。

・新燃岳では、火口直下を震源とする火山性地震は少ない状態で経過しました。火山性地震の月回数は 154 回（９月：381 回）で、前月より減少しました。火山性微動は観測されませんでした。

・GNSS 連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、霧島山深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められていましたが（赤矢印）、2025 年 12 月中旬頃からは停滞しています（青矢印）。なお、同基線では、2025 年７月上旬に、新燃岳の噴火活動に対応すると考えられるわずかな縮みがみられました（緑矢印）。

⑦の基線は図７の基線⑦に対応しています。
⑦の基線の直近の白丸は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。
⑦の青色破線内の変化は、鹿児島県薩摩地方の地震（2025 年 11 月３日）による変動と考えられます。
⑦の橙色破線内の変化は、日向灘の地震（2025 年１月 13 日）による変動です。
⑦の緑色破線内の変化は、令和８年熊本地震（2026 年７月 28 日）による変動です。
※新燃岳南西観測点の機器障害により、新燃西（震）観測点、霧島南（震）観測点及び高千穂河原観測点で計数している期間があります。
※赤線は火山性地震の回数や火山性微動の時間の積算（右軸）を示します。

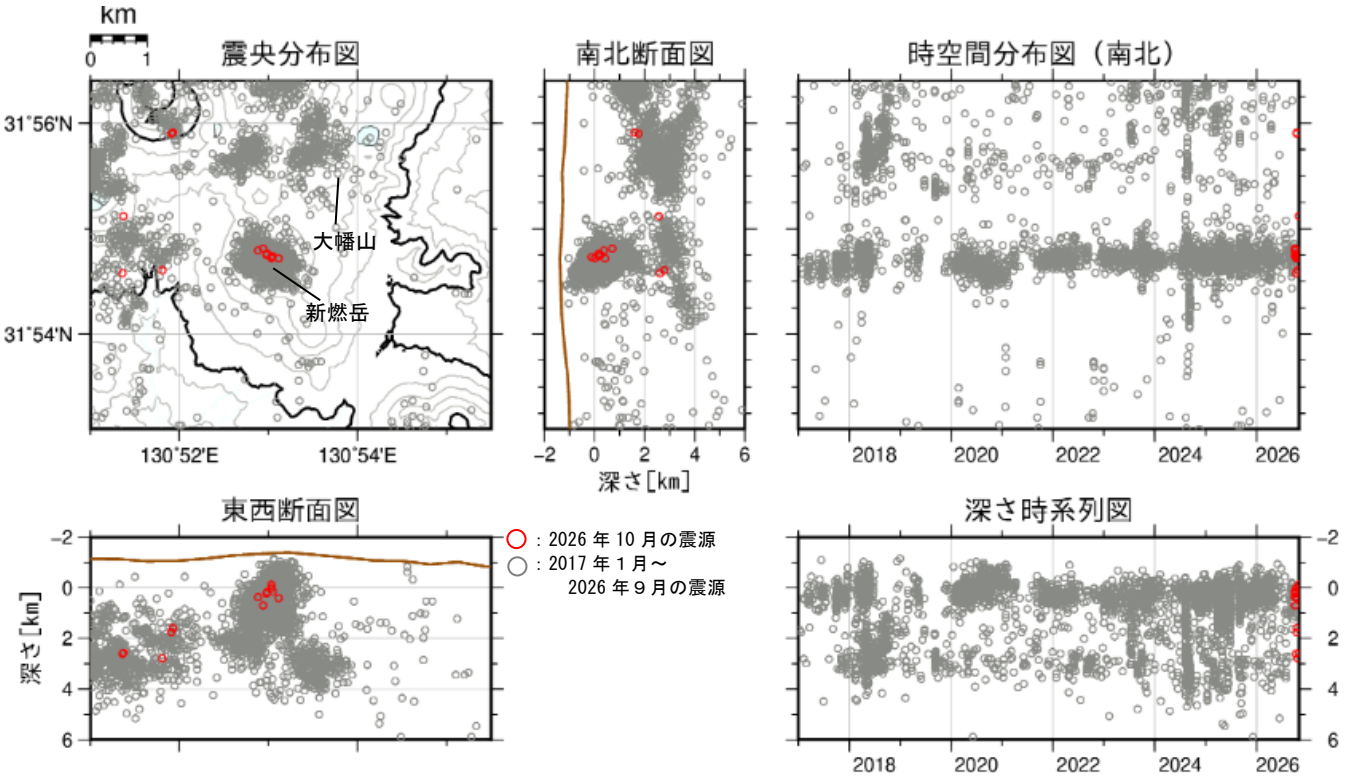


図５　霧島山（新燃岳）　震源分布図（2017 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

震源が求まった火山性地震は、主に新燃岳火口直下の深さ０～１km 付近に分布しました。

※観測点の障害により、震源が求まらなかった期間があります。

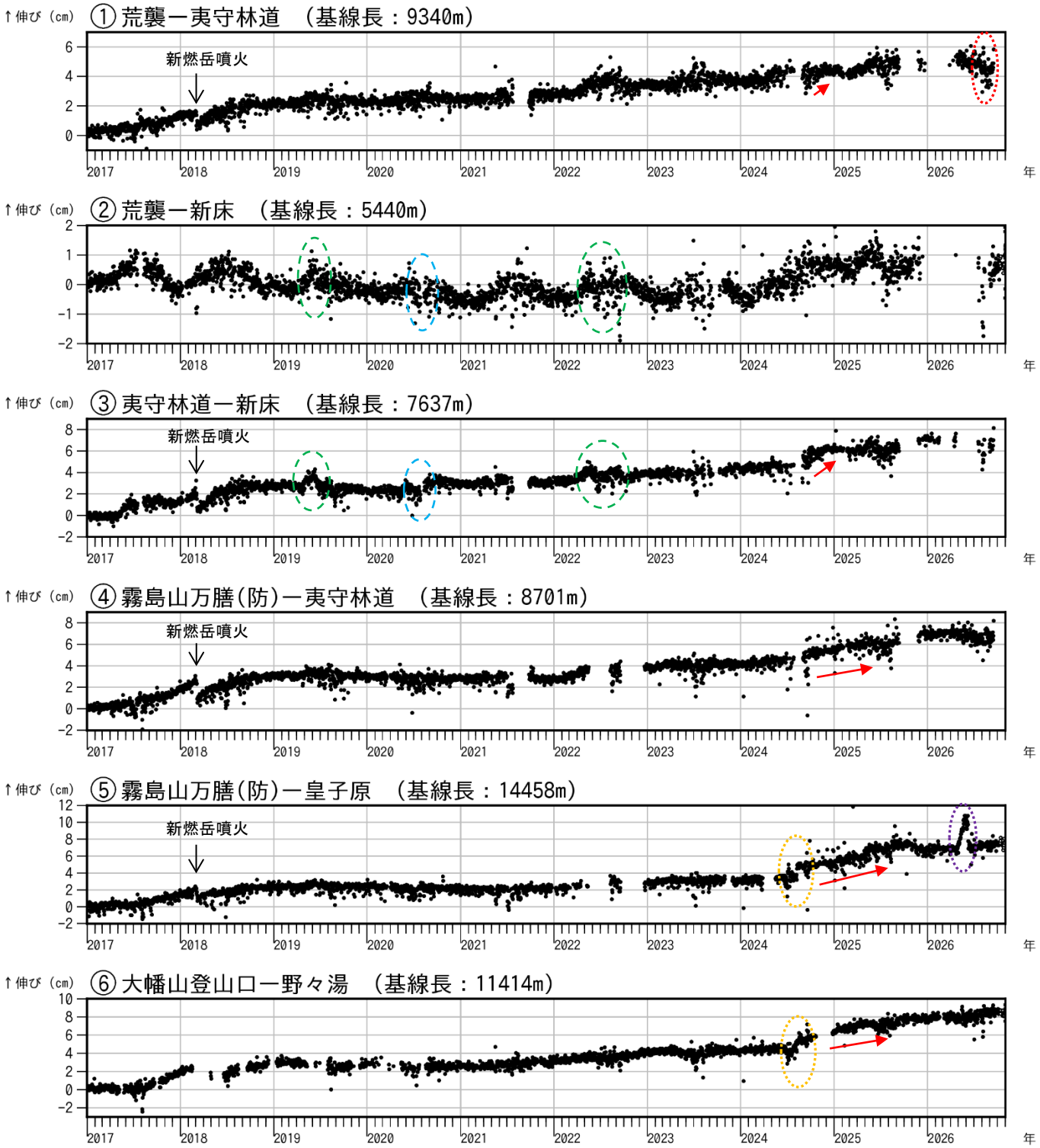


図６　霧島山（新燃岳）　GNSS 連続観測による基線長変化（2017 年１月～2026 年 10 月）

GNSS 連続観測では、2024 年 11 月頃から新燃岳付近の地下における膨張を示すと考えられる基線のわずかな伸びが認められましたが（赤矢印）、2025 年７月以降は認められません。

これらの基線は図７の①～⑥に対応しています。
直近の白丸は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。
基線の空白部分は欠測を示しています。
緑色破線内の変化は、新床観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。
水色破線内の変化は、新床観測点のセンサー台交換による局所的な変動による影響と考えられます。
橙色破線内の変化は、2024 年８月８日の日向灘の地震による変動です。
紫色破線内の変化は、皇子原観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。
赤色破線内の変化は、令和８年熊本地震（2026 年７月 28 日）による変動です。

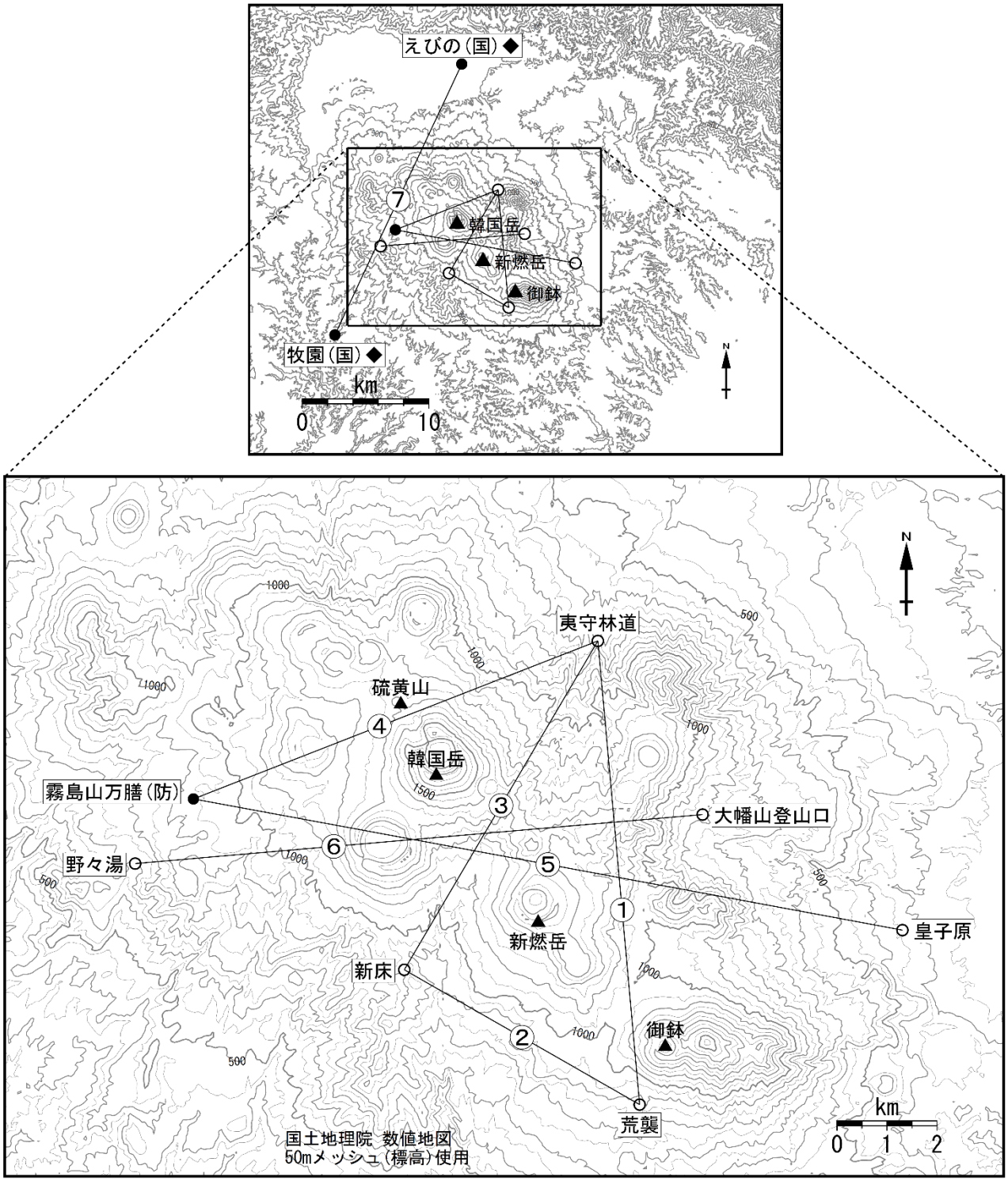


図７　霧島山（新燃岳）　GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

御　鉢

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。
活火山であることから、火口内でごく少量の火山灰等を噴出する規模の小さな現象が突発的に発生する可能性がありますので注意してください。
地元自治体等が行う立入規制等に留意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１～３、図５-①）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

28 日に実施した現地調査では、御鉢火口内で引き続き地熱域を確認しました。また、火口壁西側の噴気孔でわずかな噴気が認められました。

・地震や微動の発生状況（図４、図５-②～⑤）

火山性地震は、観測されませんでした（９月：１回）。

火山性微動は 2018 年２月 10 日以降、観測されていません。

・地殻変動の状況（図６、図７）

GNSS 連続観測では、御鉢を挟む基線には特段の変化は認められません。



図１　霧島山（御鉢）　御鉢の状況（10 月 28 日、猪子石監視カメラ）
監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

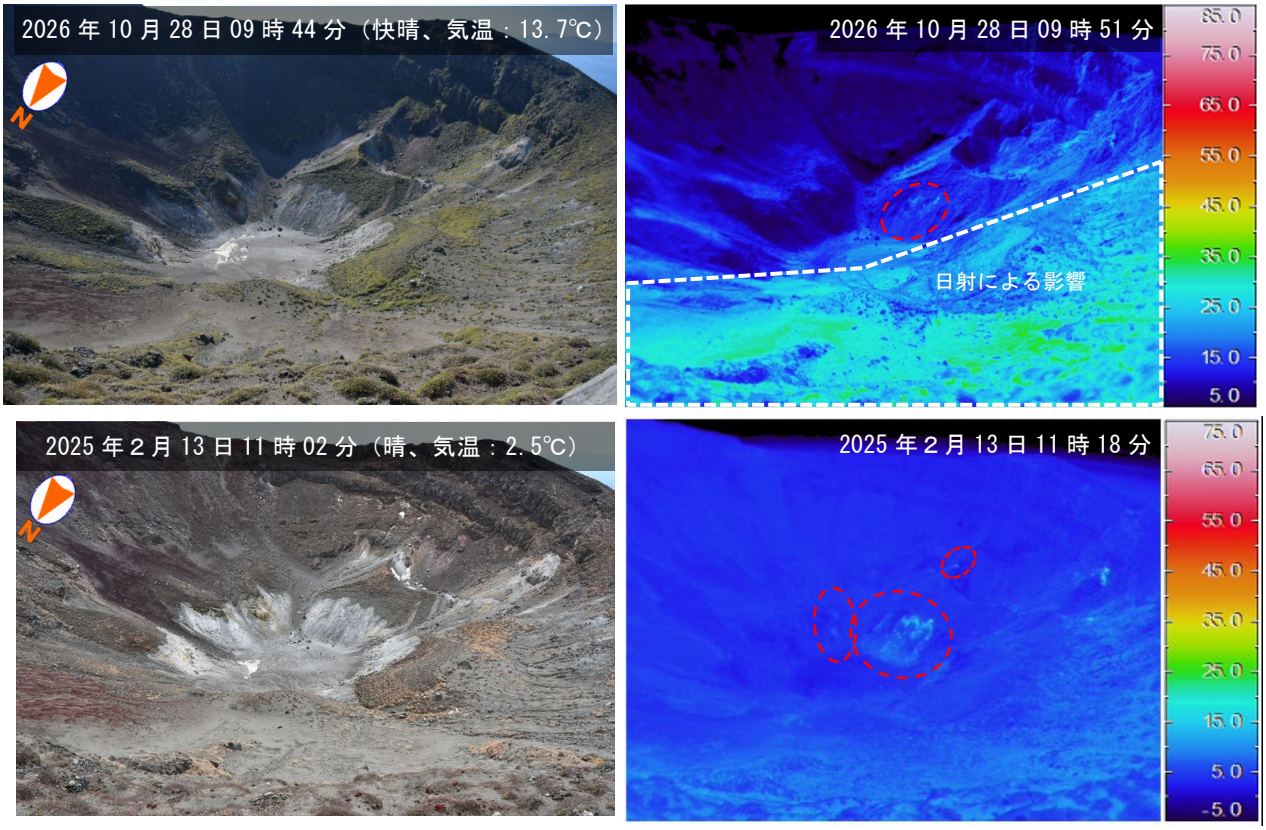


図 2-1　霧島山（御鉢）　御鉢火口内の状況（火口縁北西側から観測）

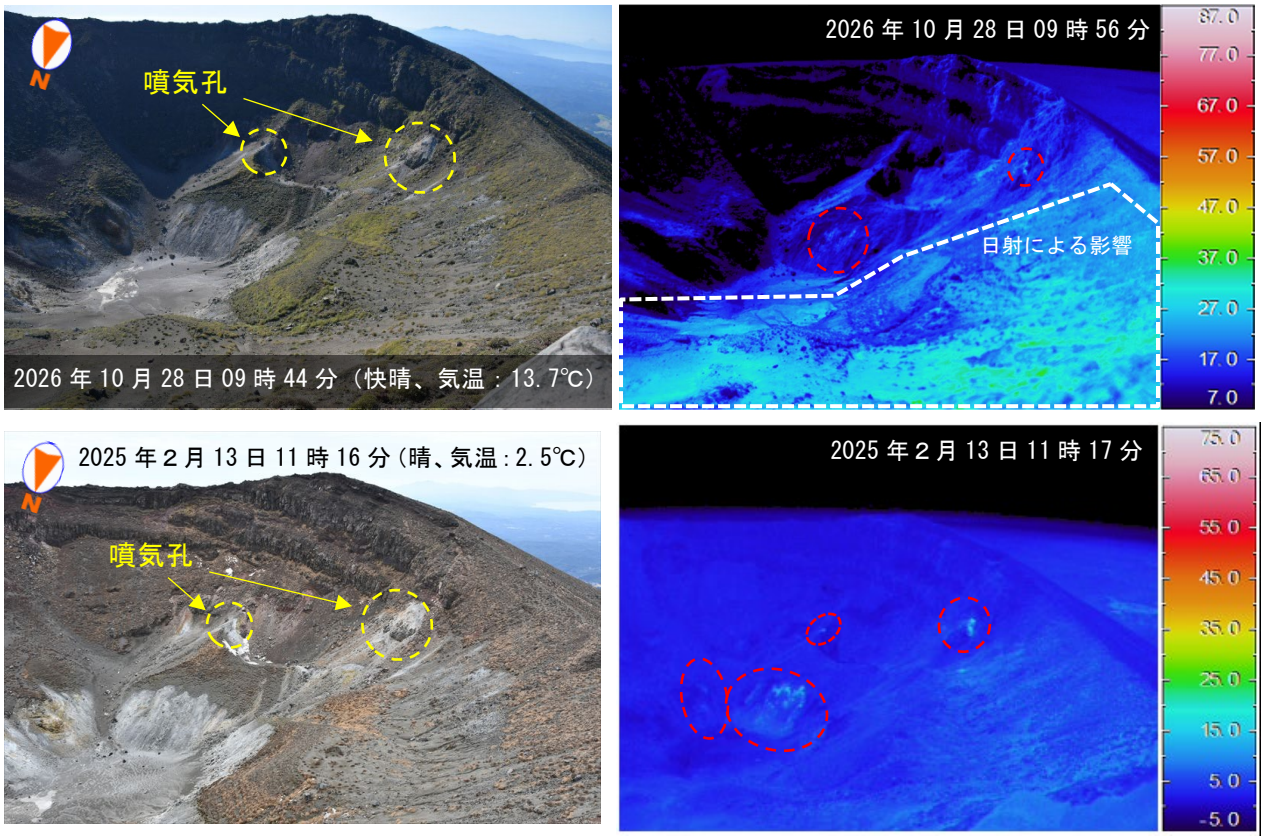


図 2-2　霧島山（御鉢）　御鉢火口内の状況（火口縁北西側から観測）

御鉢火口内で引き続き地熱域（赤破線内）を確認しました。また、火口壁西側の噴気孔（黄破線内）でわずかな噴気が認められました。

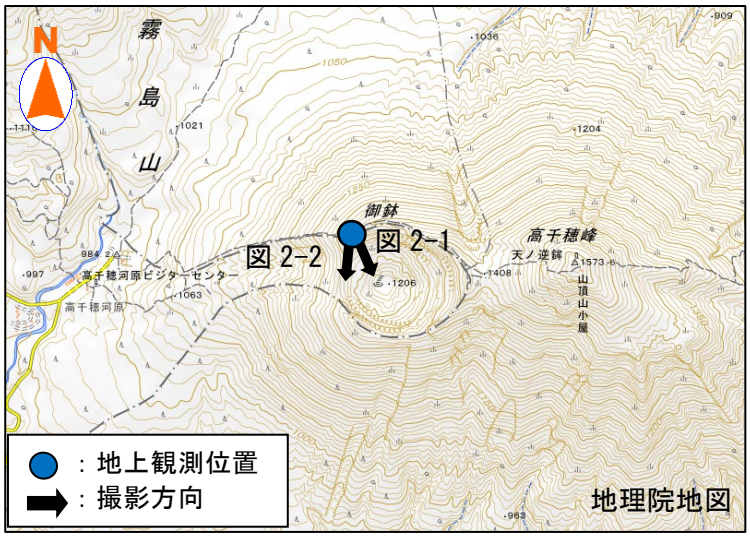


図３　霧島山（御鉢）　図２の観測位置及び撮影方向

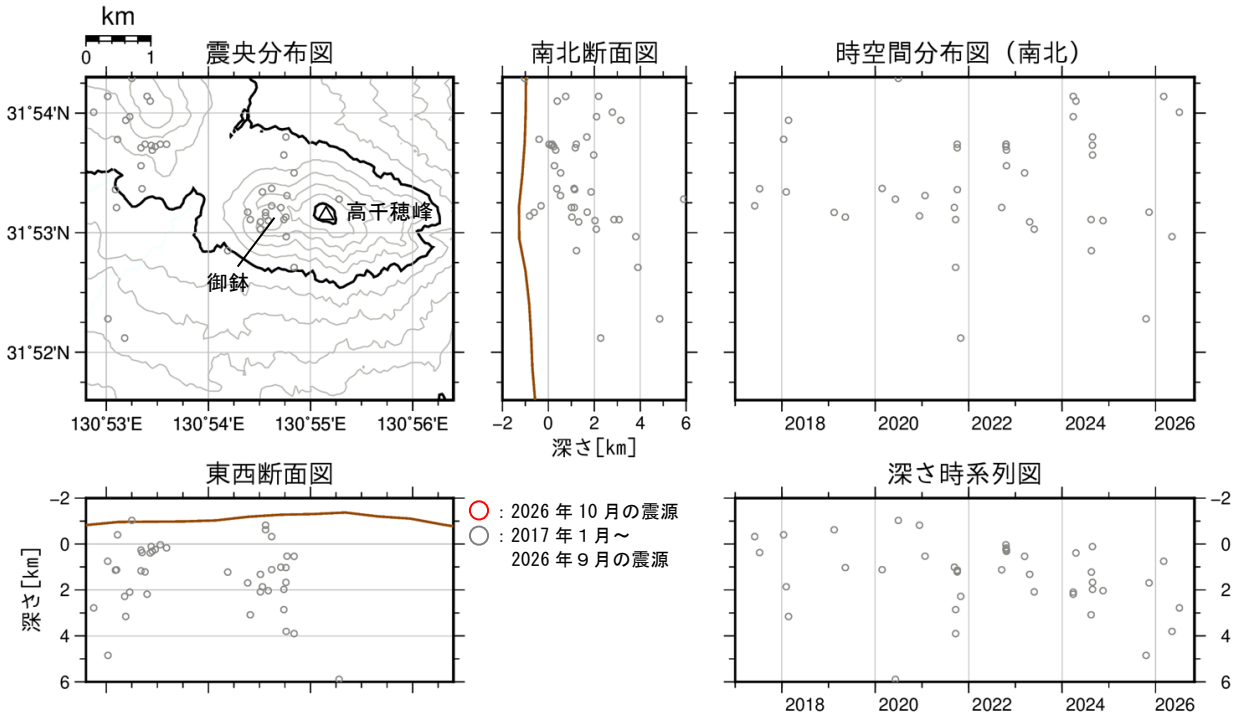


図４　霧島山（御鉢）　震源分布図（2017 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

火山性地震は、観測されませんでした。

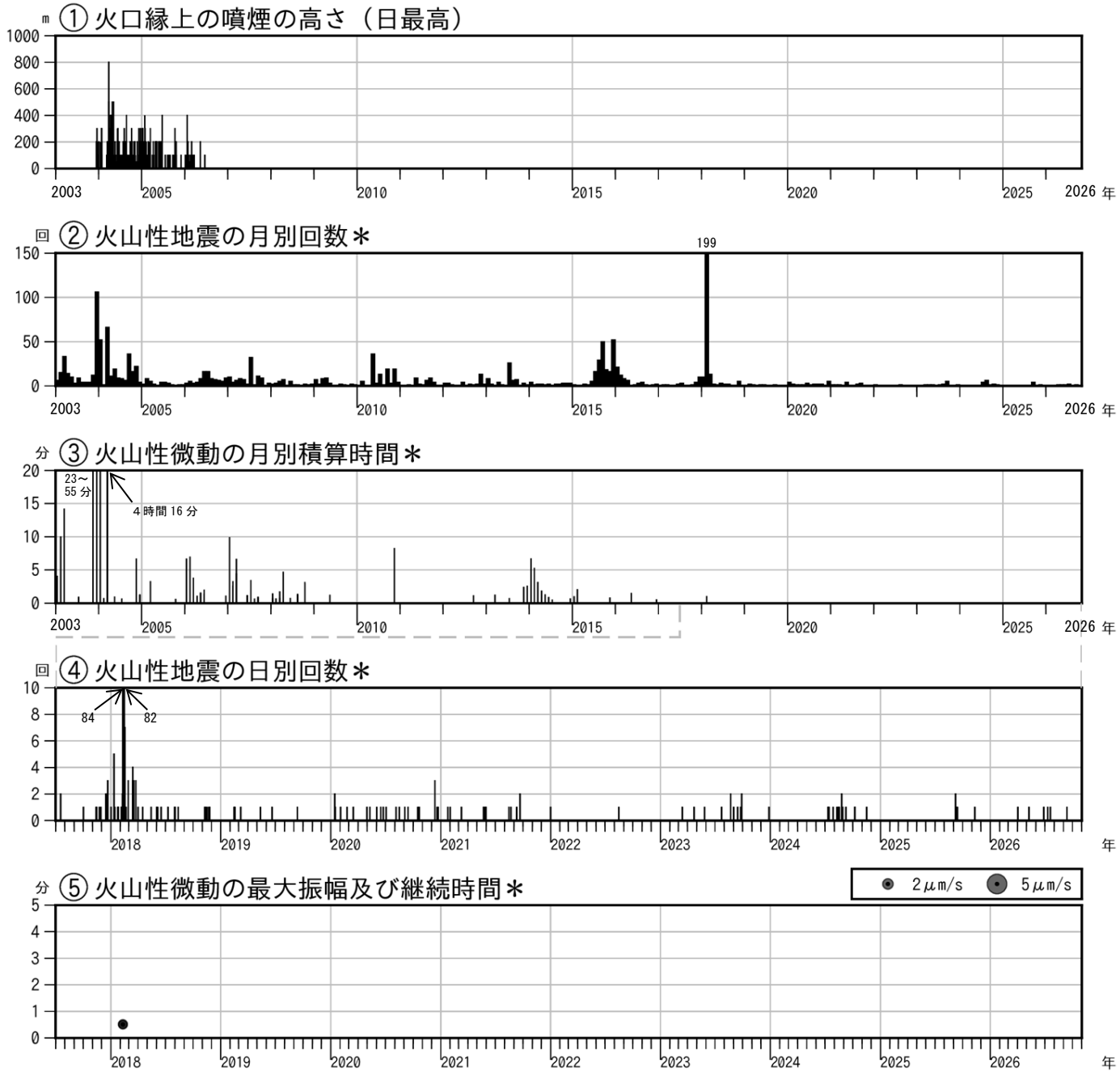


図５　霧島山（御鉢）　火山活動経過図（2003 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

・監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。
・火山性地震は、観測されませんでした（９月：１回）。
・火山性微動は 2018 年２月 10 日以降、観測されていません。

＊「高千穂峰２観測点、高千穂西（震）観測点及び高千穂河原観測点」で計数
（計数基準　高千穂峰２：上下動 2.0μm/s 以上、高千穂西（震）：水平動東西成分または上下動 1.3μm/s 以上、高千穂河原：水平動南北成分または上下動 1.0μm/s 以上）

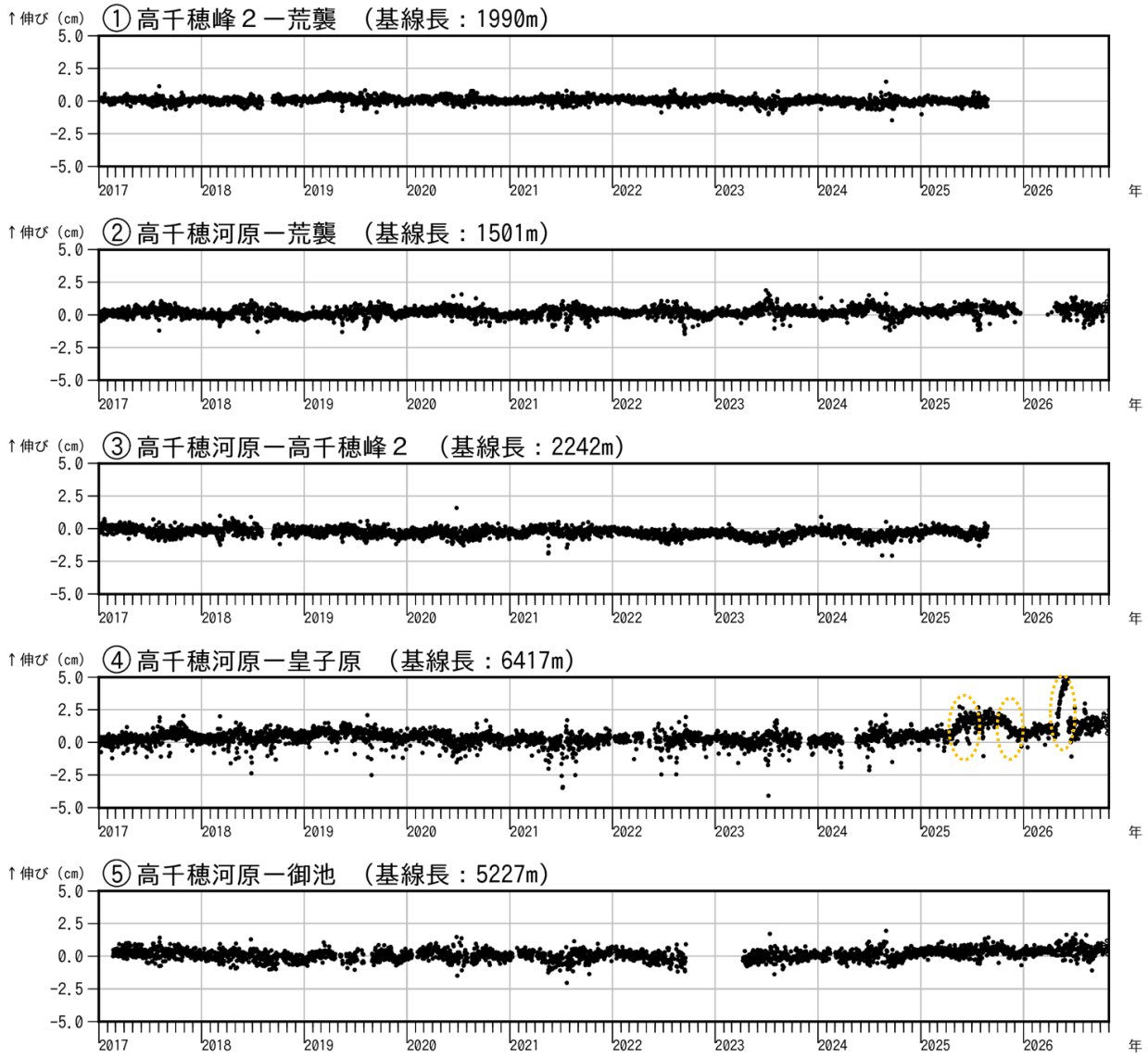
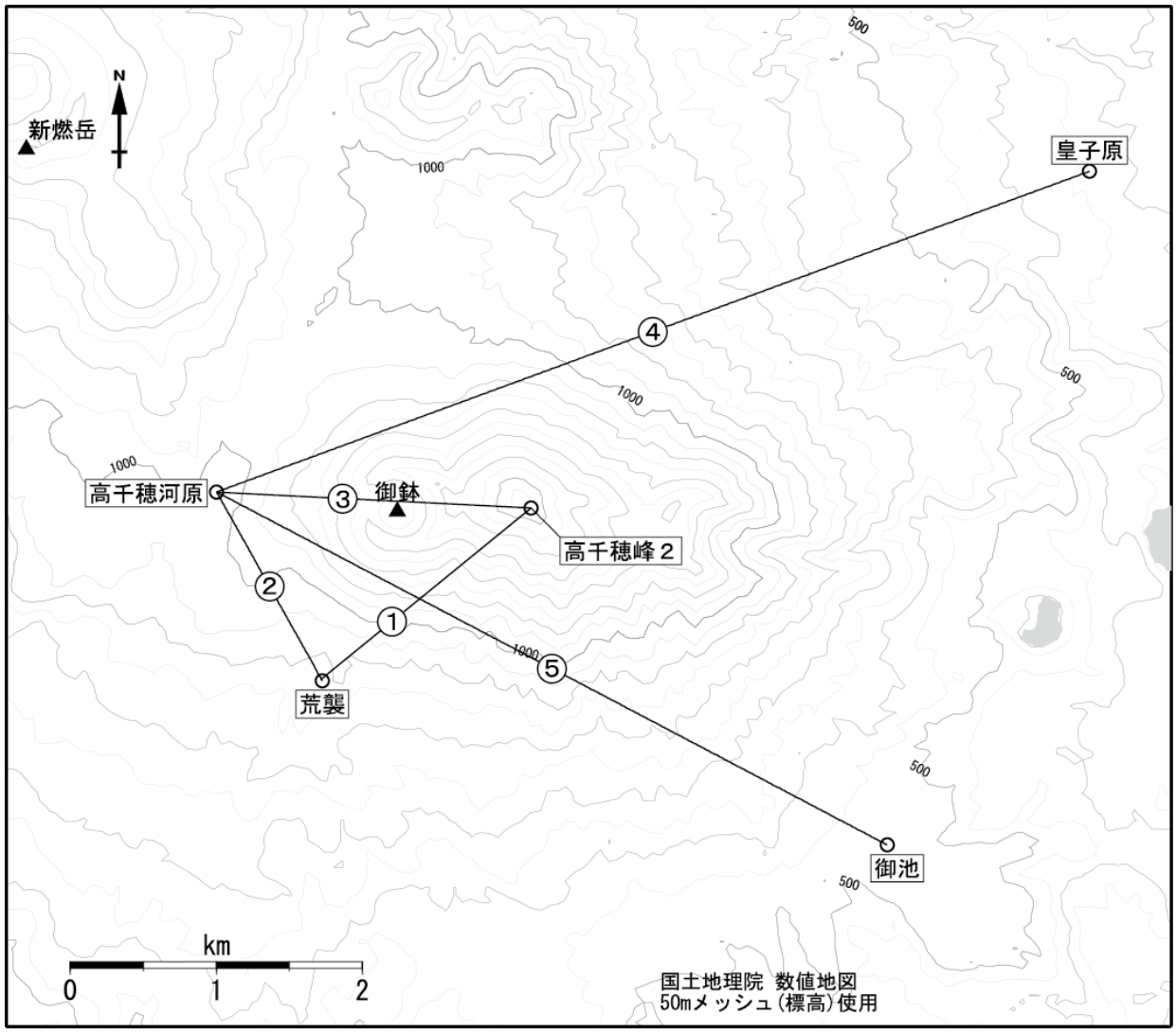


図６　霧島山（御鉢）　GNSS 連続観測による基線長変化（2017 年１月～2026 年 10 月）

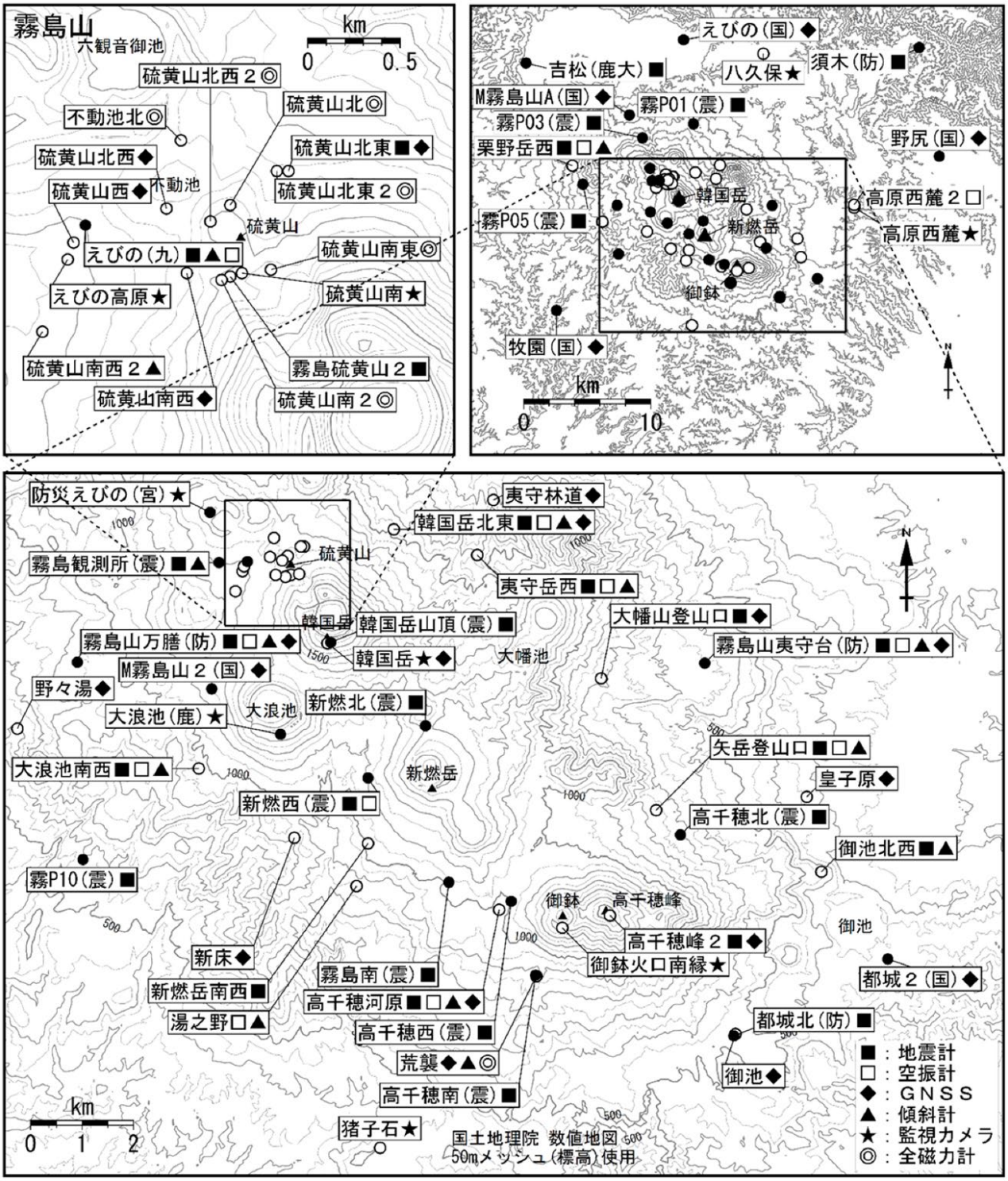
GNSS 連続観測では、御鉢を挟む基線には特段の変化は認められません。

これらの基線は図７の①～⑤に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
橙色破線内の変化は、皇子原観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院

図７　霧島山（御鉢）　GNSS 連続観測点と基線番号



霧島山　観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（震）：東京大学地震研究所、（九）：九州大学、（鹿大）：鹿児島大学、
（防）：防災科学技術研究所、（宮）：宮崎県、（鹿）：鹿児島県